昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和十四年四月一日印刷（毎月一回）
昭和十四年四月五日發行（五日發行）
【雜誌第十四年第百四十九號】

演劇映画綜合雜誌

堀頓道

第拾四年　躍進四月號

第百四拾九號

効果は勿論味も香も当代隨一

ライオン粉歯磨

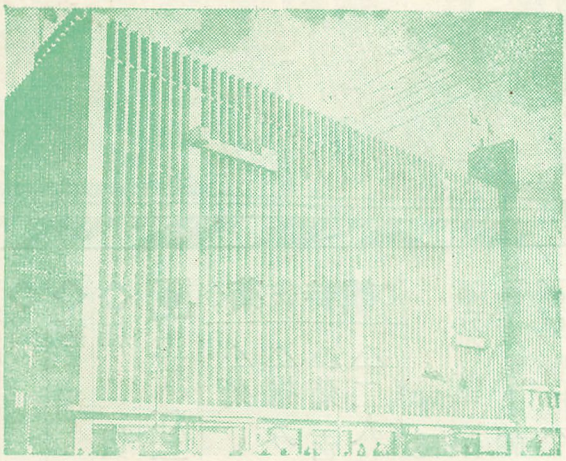
☆歯磨界の新星！

國産香料の粋を蒐め香氣馥郁、歯磨の生命たる吸着除去の力亦强大然も量に於ても、價格に於ても極めて經濟的眞に時局にふさはしい新歯磨。切に御愛用を冀上げます。

ライオン歯磨本舗
東京・大阪・名古屋

粉の飛ばぬ馴水性粉歯磨
美麗カートン（紙器）入

（定價　拾七錢）



物價國策に協力する

銃後百貨店『そごう』

大阪 心齋橋 そごう

目次

道頓堀　第百四十九號

◆狂言解說◆

◇暫……（歌舞伎座四月上演）……（二）
◇寺子屋……（同）……（三）
◇高時……（同）……（四）
◇娘道成寺……（同）……（五）
◇加賀鳶……（同）……（六）
◇上演狂言に就いて……（歌舞伎座四月興行）……遠藤爲春（七）

◇菊吉特輯◇

△菊と吉……食滿南北（一一）
△摑み合ふ菊吉……渥美清太郎（一二）
△菊吉合同劇……永田衝吉（一三）
△二人は何處までも……中井浩水（一四）

◆隨筆◆

◆來雪梨園曙……篠山吟葉（一六）
◆大阪と祖父歌六……中村吉右衛門（一八）
◆早野勘平の死の史實……南木芳太郎（二六）
◆忠臣藏の見方……森ほのほ（二四）
◆加賀鳶小咄……北川康男（二二）
◆滿支旅行に就て……白井松竹會長　富田泰彥（二三）

◆關西歌舞伎の反逆性……鷲谷樗風（三七）
◆新舊合同劇は何處へ行く……菱田正男（四〇）
◆家庭劇一歩前……入江來布（三一）
漫畫—カラーセクション……酒井七馬・大槻たもつ・直木彦（三三）
□食味街……（三）□喫茶街……（五一）
□ステジドア（新舊合同劇女優名鑑）……（二四）
□近詠十句……（俳句）……元安折鶴（二〇）
□卯月狂言より…（扉）…（短歌）……木村冨子（一）
□尾上菊五郎……宇野信夫（一五）
□岡本綺堂先生逝去の記……山上貞一（六一）
◆延若の素描……酸甘郎（二六）
◆道頓堀十五年……鳥江銕也（五六）
わが家の樂園……（コロンビア提供）……（四六）
春雷……（松竹大船作品）……（四八）
兩國梶之助……（松竹京都作品）……（四九）
阿波狸合戰……（新興京都作品）……（五〇）
映畫
◆映畫界放談……玉木潤一郎（四一）
◆四月のアルバム……（五二）◆道頓堀だより……（五四）◆文樂座太夫と人形割……（五五）
◆表紙……長谷川小信〃金閣寺の久吉〃◆後記……（六二）
口繪
京鹿子娘道成寺…壹原傳授手習鑑…東京大歌舞伎舞臺集…盲長屋梅加賀鳶…（東京大歌舞伎）四月のお芝居…東錦繪…軍神西住戰車長…國定忠次（角座）妹背山婦女家庭訓（文樂座）假名手本忠臣藏…師直（延若）おかる（魁車）若狹之助（壽三郎）石堂（市藏）力彌（長三郎）顔世（宗十郎）その他忠臣藏各場面…（中座）三月のお芝居…白鷺（東京新派）紺屋高尾（角座）愛慾不發彈（家庭劇）喧嘩鳶（新舊合同劇）

銘酒
白雪
株式會社小西酒造

四月 大阪

歌舞伎座

東京大歌舞伎

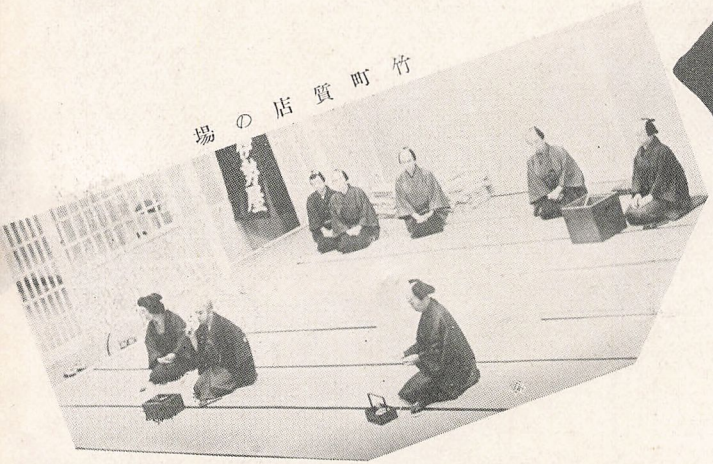
京鹿子娘道成寺

白拍子花子（菊五郎）

大館左馬五郎（吉右衛門）

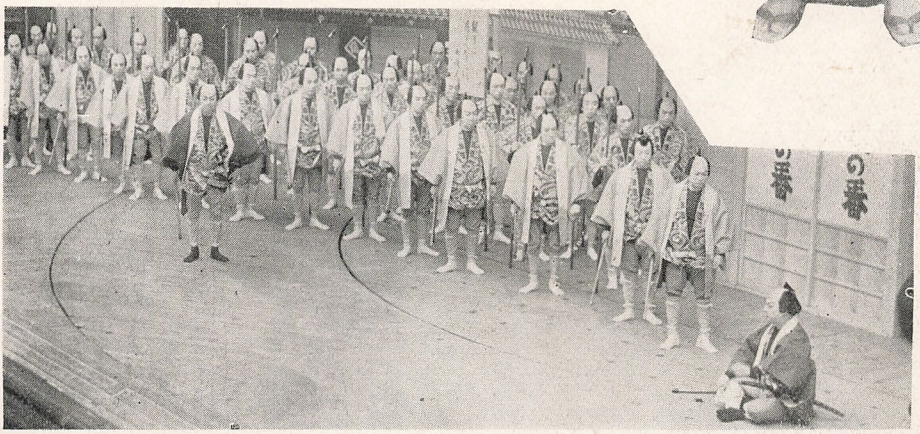
東京大歌舞伎

盲長屋梅加賀鳶

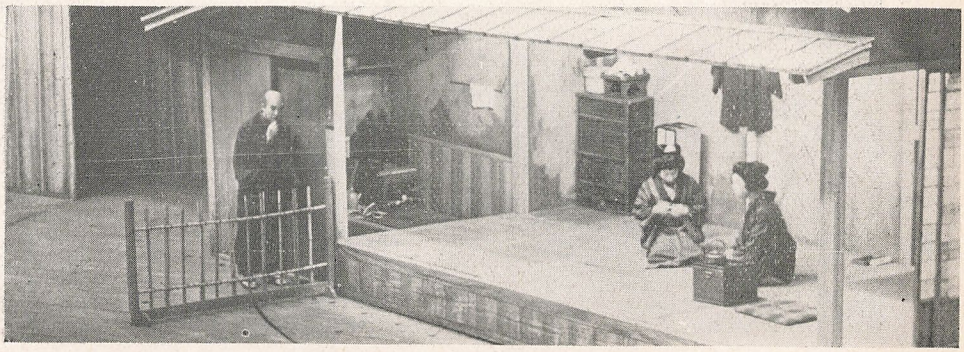


竹町質店の場

道玄（菊五郎）



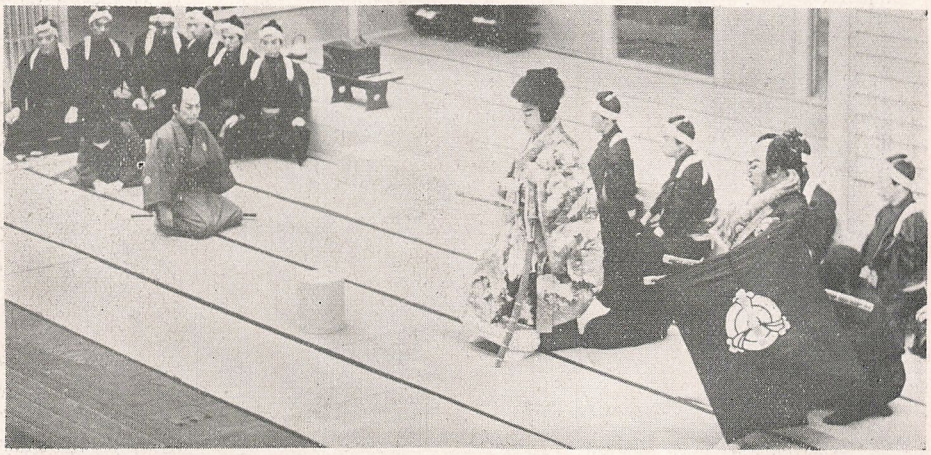
本郷通り町木戸の場



菊坂盲長屋の場

菅原傳授手習鑑　東京大歌舞伎

四月 大阪　歌舞伎座



その舞臺面

源藏（吉右衛門）

春藤玄蕃（友右衛門）

千代（時藏）

戸浪（男女藏）

松王丸（菊五郎）

新歌舞伎十八番の内「高時」

歌舞伎十八番の内「暫」

月の卷「五條橋」

花の卷「芝翫奴」

大阪市一流商店出張所

歌舞伎座五階陳列即賣店

伊藤胡蝶園　東京・大阪

花宗　南八五四〇

白梅寶飾店　南二五〇

織尾堂　南二五七九

歌舞伎屋糸店　南二五〇三

養老昆布本舗　南二四五四

大學堂眼鏡店　南六〇六五六

久保田扇舗　南二二三

大黒總本店　新町二三〇五

まねき袋物店　南三〇一二

てんぐ履物店　南六八一

菊秀　南三九五八

喜多林堂　南一〇

幕間に御高覧精々御用命の程奉願上候

興亞の春にひらく劇壇の盛事！

東京大歌舞伎

尾上菊五郎一座
中村吉右衛門一座
坂東三津五郎

關西最初の合同劇

大谷友右衛門　加入

開場一日初日

毎日初日午後二時半開幕
初日に限り二時半引幕

一第　歌舞伎十八番の内　**暫**　大薩摩連中

二第　**菅原傳授手習鑑**　一幕　寺子屋の場

三第　河竹默阿彌作　新歌舞伎十八番の内　**高時**　一幕

四第　**京鹿子娘道成寺**　道行より後ジテまで　竹本連中　長唄　鶴子連中　松永和風　伊三郎　柏出演　小村雪岱舞台裝置

五第　河竹默阿彌作　**盲長屋梅加賀鳶**　四幕

六第　月の卷　花の卷　**五條橋芝翫奴**　竹本連中　長唄連中

尾上菊五郎　市川男女藏　澤村田之助　市川團右衛門　市川照藏　尾上菊十郎　尾上菊次郎　尾上琴糸　坂東鶴飛　尾上多賀藏　坂東三津五郎　市川門三郎　中村吉兵衛　中村右衛門　市川柏洲　中村辰之丞　中村吉之進　市川團之助　市川團十郎　中村七三郎　中村梅五　尾上梅次郎　尾上菊貞之丞　尾上多賀之丞　大谷友右衛門

坂東三津五郎　市川九藏　市川染五郎　中村吉之丞　尾上鯉三郎　尾上新七郎　市川龜之丞　尾上芙雀之丞　尾上竹之助　市川女之丞　中村時之丞　中村獅好　大谷紫若　澤村千鳥　尾上梅之丞　中村華三郎　中村竹之丞　市川男女之助　坂東龜丸　市村右太之助　尾上菊之助　中村時吉右衛門

お好きな芝居を御都合のよい時間に御覽になれる一幕劇は毎日開幕前に發賣致します

東京大歌舞伎座

初日割引料金
選席七十錢
菊席一円
二等席二円七十錢
三等席二円五十錢
一等席六円
（他に入場料一銭）

一等指定席は劇場に限り前賣切切りと致します

一等五円前より發賣
二等席は日前より櫻席前より發賣致します
故に觀劇は是非當日の昼の部にて發賣致して居ります

（戎）二八二六番
二八二八番
前賣切符は京阪神專用電話にて發賣致します

歌舞伎座・朝日ビルブレイガイド・四條南座・京都松竹劇場・京阪案内所・心齋橋京阪案内所・南海ガイドセンター・新京極松竹案内所・神戸松竹劇場

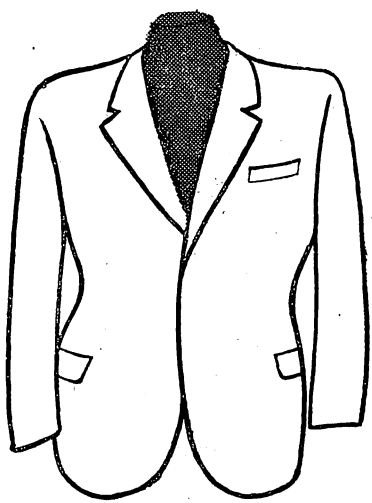
大阪毎日新聞社の事業

大阪毎日新聞
東京日日新聞
英文「大阪毎日」
大毎・小學生新聞
東日・小學生新聞
サンデー毎日
點字「大阪毎日」
エコノミスト
寫眞特報「大阪毎日」
大日本青年
ホーム・ライフ
映畫教育
映畫とレビュー
新興婦人
大毎コドモ
大阪毎日新聞縮刷版

よろづ御便利な

はるの

背廣服



春の紳士洋服地多數取揃へて御座居ます。

三階　洋服部

大阪・アベノ橋

大鐵百貨店

電話代表天王寺㊼五一三一

四月の芝居

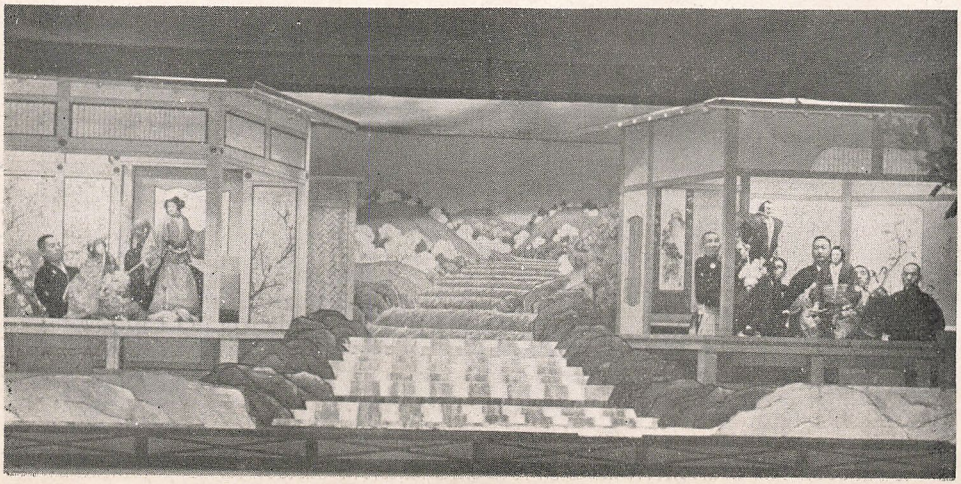
角座

「東錦繪」お染久松二役（延見子）

「國定忠次」
忠次（小太夫）

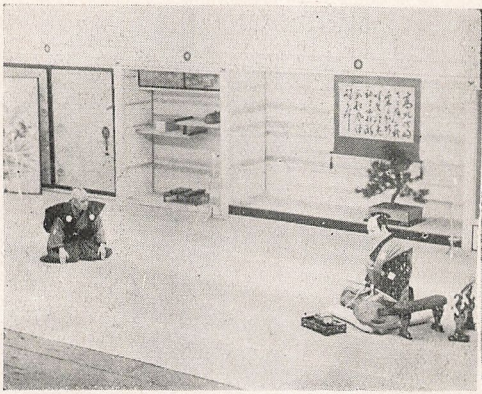
「軍神西宇戰車長」

文樂座



「妹春山婦女庭訓」

假名手本忠臣藏



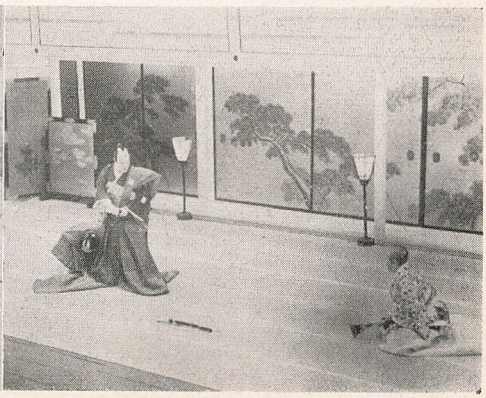
建長寺の場

兜改めの場

おかる（魅車）

師直（延若）

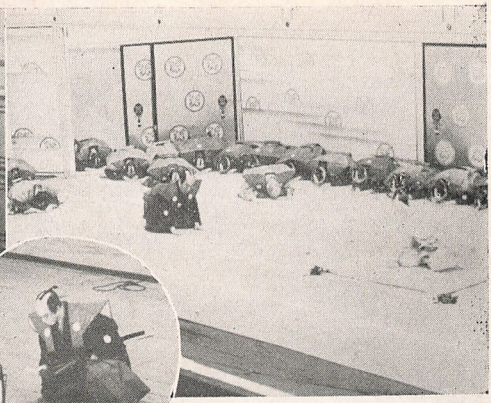
おかる勘平道行の場



殿中松の間の場

四月の中座

勘平住居の場



鹽谷邸の場

城明渡しの場

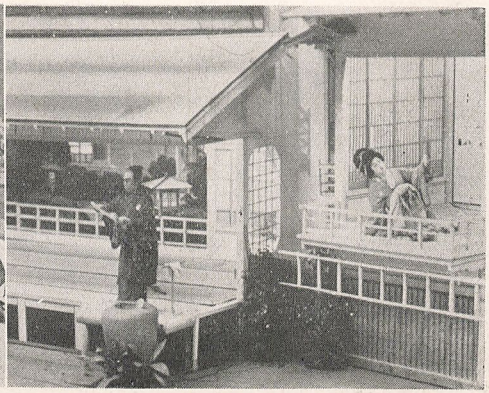
力彌（長三郎）

石堂右馬之亟（市藏）

若狹之助（壽三郎）

顏世（宗十郎）

吉良邸討入の場



一力茶屋の場

★三月の道頓堀★

歌舞伎座・東京新派「白鷺」舞臺面

家庭劇

「愛慾不發彈」

海野照造（天外）

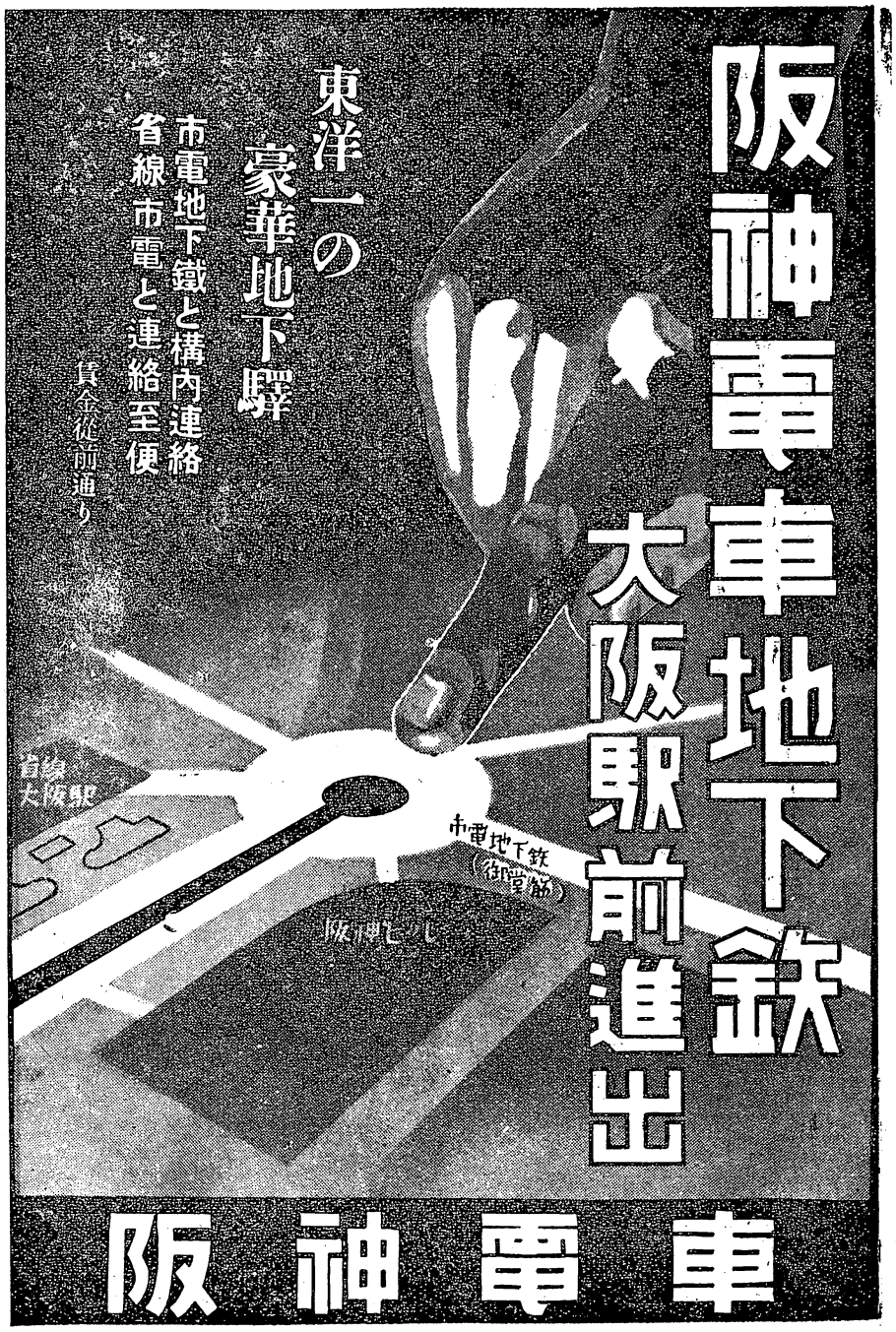
川口良一（十吾）

角座・大江美智子追善劇

高尾太夫（大江美惠子）

南座・新舊合同劇

「宣華薔薇」


阪神電車地下鉄
大阪駅前進出
東洋一の
豪華地下驛
市電地下鐵と構内連絡
省線市電と連絡至便
賃金從前通り
省線大阪駅
市電地下鉄
(御堂筋)
阪神ビル
阪神電車

胃酸過多症・胃痛に

ノルモザン錠

珪酸アルミニウムを主効分とする今迄にない、制酸・鎮痛劑で

①…たゞれた胃壁を被ふて胃液の刺戟を除きます。

②…胃中の余分の胃酸を吸著して酸度を低下します。

③…分泌腺を收斂して疼痛を輕快ならしめます。

【ノルモザン錠の主治効能】

胃酸過多症、胸やけ、噯氣、溜飲、胃痛、胃潰瘍、きみづ便秘、悪醉、二日醉、胃痙攣船・車暈に奏効す。

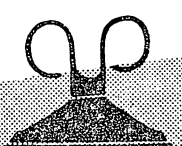
〔價格〕一〇錢、五〇錢、一圓、二圓、三圓五〇錢、五圓

全國知名の藥店にあり。

發賣元

武田長兵衛商店 株式會社

大阪市東區道修町



ファンの熱望に應へ待望の續『愛染かつら』同一スタッフ・キャストにて製作に決定！

御期待下さい

川口松太郎氏の原作
名匠・野村浩將監督

續愛染かつら

上原謙・田中絹代
桑野通子
佐分利信
大船總動員

五月第一週
松竹系封切

金鷄印罐詰二大製品

1. 純良精選の牛肉
   で御座います
1. 不意の御來客に
1. 御酒ビールの御友に
1. キャンピングに
1. ハイキングに
1. 各地百貨店
   著名食料品店
   に販賣致して居ります
1. キンケイ印を御指定下さい

洋酒・食料品・罐詰問屋

大阪市東區豊後町三番地

株式會社 横山商店

演劇映畫綜合雜誌

道頓堀

昭和十四年　四月菊吉特輯

卯月狂言より

木村富子

兩びんに鯰のひげのゆら〳〵と歌舞伎の春はのどけかりけり（暫）

住の江の松は古しと羽ばたきつ奇しき法師が舞ふおもしろさ（高時）

うすれ行く門火のけふり果敢なくもいろは送りの歌のあはれさ（寺子屋）

白拍子の羯鼓をうてば花ざくらほろゝと散りぬ艶なる夜かな（娘道成寺）

加賀蔦の勢ぞろひより香ぐはしう吹きわたるなり卯月の風は（加賀蔦）

笛竹のしらべ冴えゆく月かげに大薙刀ぞゆゝしかりける（五條橋）

びんばらの椎茸髷もふつくりと氣味ようひゞくその足拍子（供奴）

第百四拾九號

歌舞伎解説

暫

四月の歌舞伎座

昔は『曾我』が初春狂言の代表的なもので、あつたと同様に『暫』は顔見世狂言の代表的なもので、江戸荒事の根元、市川家十八番の隨一と云つていゝでありませう。眞に夢幻的な徴象劇ですが、其處には江戸人特有の權力者に對する反抗や、それを飽和するナンセンスが盛り込まれてをり、舞臺裝置衣裳扮裝には愉み得るものがあります

この荒事劇を創始したのは元祖團十郎ですが、それを二代目が大成し、九代目が更に修正したのが、今日傳へられる處のもので、實にワンダフルな、愛すべき古典歌舞伎であります。

舞臺は鶴ヶ岡八幡社頭で、關八州を切り隨へた淸原武衡は名劍雷丸を額堂に納め、自ら主權者の位に登り、その祝賀の式を擧げる。同じ額堂に大福帳の額を奉納した加茂ノ義綱、義鄕兄弟と許嫁の桂ノ前等は殊更に不屈者として社前に引据えられる。義綱は朝野を思ふ眞心から奉納した大福帳であると說き明すが、それには耳を貸さず桂ノ前を已の意に從はせやうとする、が反つて惡逆ぶりを咎められるので、腹心の成田五郎等に命じて義綱始め一黨を成敗させ、それを下物に酒盃を取上げる。

俗に腹出シと呼ぶ同じ扮裝をした四天王格の家來達が大太刀を拔き掛けると、花道の揚幕から『暫く〳〵〳〵』の聲をかけ、川柳に曰ふ『大きな風呂敷の中でしばらアく』の通り、大きな柿の素袍の袖を張り、三升鰐の大太刀を腰に着けた吉例の姿で鎌倉權五郎景政『暫』が現はれ、これも吉例の長ゼリフを述べ立てる。俗に『鯰坊主』と呼ぶ入道震齋や『鯰女』のひさご、或は家來共が引立てやうとするが、反つて暫の景政に睨み返される。武衡が成敗の邪魔するのを怒ると、權五郎はその惡道無道を詰め、武衡が奉納の雷丸は國家を呪ふものであると看破し、ひさご（實は景政の妹）も義綱が勘氣の因となつてゐた國守の印を懷中から取り出して見せ、實は源氏方の間者であつたことを打ち明ける。

武衡主從一同口惜しがるが如何とも手出しがならず、景政の義綱等を悉く救けて立ち去らせ、追ツ取卷く家來大勢の首を大太刀で一度に打落し、その太刀を肩げて意氣揚々と引上げる。

歌舞伎解説

寺子屋

四月の歌舞伎座

天滿に三つ兒を生んでお上から五十貫文を授かつた、――かういふニュースを聞き込むと、出雲、松洛、千柳等の作者達の頭には大近松の「天神記」が浮びました。それには白太夫の子の荒藤太、小松、小梅の三人があります。續いて浮かんだのが菅公の『梅は飛び櫻は枯るゝ世の中に何とて松のつれなかるらん』の歌で、この中から梅王、松王、櫻丸が三つ兒の兄弟として作り出され、更にそれへそれぞれ因みのある春、千代、八重の三女房が配されました。

武部源藏の邸址が現在大原の芹生にあるさうですが、本當は江戸の書家建部傳内から考へついたのだとも云はれてをります。それはさておき、全曲の場割りを記すと左のやうになります。

大　序＝大内
　　加茂堤（齋生君と苅屋姫の遁走）
　　菅公館（源藏へ筆道傳授）
二段目＝門外
　　道行
　　津の國安井
三段目＝土師の里道明寺
　　吉田社頭（車曳）
四段目＝佐田村（賀の祝）
　　筑紫配所
　　天拜山
　　北嵯嵯の隱れ家
五段目＝源藏住家（寺子屋）
　　大内（時平一味の最後）

中でも四の切『寺子屋』の段が最も傑出し、淨瑠璃に屢々見る首實檢中での代表的なものであります。

天下に君臨する野望を抱いてゐる藤原時平は、對立の地位に在る菅丞相を陰謀者として筑紫へ左遷させただけで滿足せず、嗣子菅秀才をも亡きものとせんと計つてゐるので、源藏夫婦は我子として圍まつてゐる。この二人は不義故に菅原家から勘當になつたが、筆道傳授の卷は與へられた。その恩義に報いる爲には身命を堵けてゐた。併し菅秀才を隱匿してゐることが時平の耳に入り、首を打つて渡せとの手詰めになつた。處へ偶々器量勝れた小太郎の寺入りしたのを幸ひ、主君の爲と心を鬼にして身替りに立てた。檢視役の松王の證言を信じて玄番はその首を持ち歸つた。が實は當の松王丸の一子で女房千代と合意の上で身替りとしたのであつた。時平は松王にとつて主ではあるが、牛飼舍人に取立ててくれた菅公の恩をも忘れてはゐなかつた。

歌舞伎解説

高時

四月の歌舞伎座

この『高時』は默阿彌作の『北條九代名家功』の上の卷で、九代目團十郎の活歴熱に應じて執筆されたのであります。後年『名高時天狗酒宴』と改題され、更に今日のやうに『高時』と呼ばれて、新歌舞伎十八番の一つ。『太平記』の相模入道の田樂や鬪犬の事を脚色したのであります。

北條家門外の場――浪人安達三郎は母（渚）悴（泰松）を連れて仕官の爲に鎌倉に來り、北條の門外を通りかゝると、高時の愛犬雲龍が三郎の母を嚙むので、三郎は怒つてこれを斬り捨てる。それと知つた北條の家來長崎次郎始め大勢が取り圍む。三郎は母と悴を助ける爲に進んで繩にかゝるが、何か北條家に遺恨あるものと見做され、親子三人は門内へ引ツ立てられる。

北條家奥殿の場――晴れ渡つた秋の一夜、高時は愛妾衣笠を始め侍女數人を傍に侍らせ、盃の數を重ねてゐる處へ、長崎次郎が進み出て、浪人者が愛犬を打ち殺したことを告げるので、高時は怒つて死罪を言ひ渡す。それを聞いた大佛陸奥守はその成敗の不當を說いて諫めるが高時は聞き入れず、改めて即刻死罪を命じる。處へ城之介入道が姿を現はし、月は替れど義時公の命日、人命を斷つては祖先へ對し不孝であらうと諫言する。高時も流石にこれで思ひ留まり、酒宴の興を新にするため衣笠に舞を所望し、自ら催馬樂の扇拍子を取る――。

その舞の終る頃、一陣の夜風に燈臺の燈火が悉く消え、俄に雷鳴して電光が閃く。衣笠始め侍女は恐れて奥へ逃げて入る。その闇中に忽然として魔界の天狗ども大勢が現はれる。高時は住吉春日の田樂法師が訪れて來たものとのみ思ひ込み、進んで新曲の秘傳を受ける。天狗は高時を引き立て、舞にことよせ樣々に飜弄する。とゞ〳〵天王寺のや、妖靈星を見ざるか……の唄を繰返し、高時を突き倒し引き倒して囃し立てる。この時、衣笠と侍女、城之介入道等が雪洞を灯して内の樣子を窺ふので天狗どもは一時に消えて失せる。

失心から覺めた高時は、始めて魔界のものにたぶらかされたのを知る。空には冷笑ふやうな怪しい聲が聞える。

歌舞伎解説

娘道成寺

四月の歌舞伎座

日本舞踊の中でも『道成寺』ほどの大物はありますまい。またこれほど種々な形式を生んだ舞踊もありますまい。その構成も、その演出も實にすばらしく、始めから終りまで眞に絢爛たるものであります。殊に五十餘種の中洗練され修補されて今日に傳はる『京鹿子娘道成寺』はその代表的なもので先づ完成された曲と云つていゝのであります。この踊がいかに大物で、難物であるかは、その展開する順序を觀ただけでも分かるので、即ち次のやうになります――道行、亂拍子、急の舞、扇の踊、手踊、手鞠の段、花笠の踊、（こゝに所化の花傘の踊挿入）手拭の踊、羯鼓の舞、手踊、鈴太鼓の踊、鐘入、祈り、蛇體、押戻し――この十五段で一時間餘に亘る長いものですが、いかに變化が多く、興味も深いと同時に、いかに手強いものであるかも分かるのであります。本家本元の能では演技にも囃子にも謠にも秘傳があつて、秘曲中の秘曲と言つていゝのですが、踊の方でも許し物の中の隨一でありませう。紀州道成寺で撞鐘を再興しその供養を行つたが、女人の入場は堅く禁じた。それには仔細がある。即ち昔この所の眞子の莊司なる人の娘、毎年莊司の許を宿として熊野詣する山伏を戀ひ慕ひ結婚を迫つたので、山伏は驚いてこの道成寺に逃げ込み、鐘を下ろしてその内に身を匿した。跡を追つて來た女はこれを大いに恨み、その一念は毒蛇となつて鐘に這ひ纏ひ、遂に鐘を熔かし山伏を取り殺した――かういふ事件の爲に女人禁制としたのであるが妖艶な一人の白拍子の舞を舞ふ代り鐘の供養を拜ませてくれとの乞ひを容れたところ、舞の中に次第に鐘樓に近づき、人々の恍惚としてゐる隙に乘じ、鐘の中に飛び入ると、鐘は再び地に落ちた。これこそは全く以前の女の執心の爲す業であつた。寺僧等は經文を唱へ一心不亂に祈念すると、法力に鐘は搖ぎ出て内からは蛇體が現はれ、僧に對して立向つたが、終に祈り伏せられ蛇體は日高川に飛び入つて姿を消した――これが道成寺傳說を採つた能道成寺の概略ですが、舞踊の方もこの能の内容を踏襲しつゝ、能とは別趣の豪華な雰圍氣を醸し出してゐるのであります。

歌舞伎解説

加賀鳶

四月の歌舞伎座

先代菊五郎は豫てから「村井長庵」を演じたがつてゐたが、それよりもシツクリ體に嵌つた役々を設けて、新に默阿彌が書卸した事がこれで原作は七幕十四場、今度はその中から三幕六場が上演されます。强惡な按摩道玄の役は即ち長庵の穴を行くもの、加州家の鳶と四十八組の町火消との喧嘩は實説を取込んだものであります。

（序幕）　お茶の水土手際の場。百姓太次右衛門が疝癪に惱む處へ道玄が通りかゝり、療治をしてやる中に胴卷へ手が觸れ、持ち前の惡心から太次右衛門に當て身を喰はして金を奪ひ、太次右衛門が息を吹き返すので遂に斬り殺す折から道玄とすれ違つた加賀鳶の松藏は道玄の落した煙草入を拾ふ。

（返し）　本郷通町木戸の場。加賀鳶と同役火消の喧嘩があるといふので町木戸が閉される。爰へ加賀鳶の同勢が木戸を破つて押出さうとする。と梅吉が駈けつけて、顏役の頭取連が仲人となり一先づ預けてくれとあるから此方も引上げてくれといふので、一同も仕方無く引上げる。

（二幕目）　菊坂盲長屋の場。道玄の女房おせつが留守居してゐる所へ姪のおあさが訪ねて來て、五兩の金を主人から貰つた話をすると、おせつは盜んだのではないかと疑ふ。立聞きした道玄は、樣子がありさうだとおせつを伊勢屋へ訊かせにやつた跡、情婦お兼とおあさを嚇して無理に主人の世話になつたと云はせお兼には僞手紙を書かせる

（同）　竹町質見世の場。伊勢屋へ道玄とお兼が連れ立つて來て、おあさを弄んだと因緣をつけ、僞手紙を證據に百兩をゆする。處へ松藏が來合せ、證據といふおあさの手紙と淸書を比べて、手が違つてゐると一本參らす。道玄は强請で突き出せと腰を据えるが、とどお茶の水で落した煙草入と十兩を貰つてお兼と一緒に逃げ歸る。

（三幕目）　道玄内の場。お兼と酒を飲みつゝ道玄はおせつを折檻する。おあさが預けられた先から逃げたのをおせつの指圖と思つてゐるからで。爰へ家主が血に染む布子を犬が咬へ出た事を話すので、道玄は高飛びの支度をする手先が踏ン込みお兼は取押さへられ道玄は遁れるが、遂に赤門前で捕へられる。

（ほのぼ）

歌舞伎座四月興行上演狂言に就て

遠藤爲春

第一の『暫』は歌舞伎十八番の內でも『助六』や『勸進帳』と共に特に傑作の狂言で現在でも屢々上演され、其の都度好評を博してゐますが、九代目團十郎は文久四年十一月に初役で之を勤めました。時に年齡廿八才でしたが、無論小生など知らう筈はありません。小生が九代目の『暫』を初めて見たのは明治二十八年十一月の歌舞伎座で同優三度目上演の折です。その時には唯もう吃驚しただけでした。九代目の暫を除いては新藏のなまづ坊主が評判もよく又私等の目でもよかつたものです。已に眼を患つて繃帶をしてゐましたが、あれだけのなまづは其後一寸見られません。ウケを故市川權十郎、女なまづを故市川女寅（後の門之助――現男女藏の父）、太刀下を現在の幸四郎、姫を故中村明石が演じてゐました。腹出しは四人で八百藏（故中車）が成田五郎を、後の三人を先代壽美藏、先代猿藏、故松助が勤めてゐました。此頃は恰度花道にガスを使つてゐた頃で、花道の下から突き出たガス燈の爲に九代目の暫の素袍の袖が焦げた事を今もはつきりと覺えてゐます。此の『暫』は九代目の無數の當り役の內でも特に代表狂言として讃えられ、淺草にも九代目を記念するのに暫の銅像を以てしてゐる位です。玄鹿館がアーク燈を用ひて初めて舞臺面を撮つたのも此時です。九代目歿後は幸四郎が其の後を承けて屢々上演して好評を得てゐるのは御存じの通りで、

羽左衛門も再度上演し、吉右衛門、三升もしてをります。又之を女に直した『女暫』を今の歌右衛門が上演して好評を博し、故梅幸も演じてをります。今回の三津五郎は無論初役ですが、始終荒事を勤めて好評の同優の事ですから無論上出來の事と期待されます。

○

第二の『寺子屋』には古來幾人もの名優が苦心に苦心を重ねた名型があります。松王は小生が知つてからは團菊以外に先代芝翫（現歌右衛門の父）故團藏（現九藏の父）等が傑出したもので、源藏は團菊以外中村宗十郎が名演出を示したさうですが、遺憾乍ら小生は是を知りません。こちら出の俳優では故鴈治郎や故仁左衛門の得意としたものです。特に故鴈治郎は此の源藏を得意とし、東京でも屢々勤めてその都度好評を博しました。事實、鴈治郎の當り役中でも特に出色のものです。東京で初めて同優が源藏を演じたのは若年の砌東上した時の新富座です。此時は五代目の松王、先代左團次の玄蕃と云ふ大顔ぶれでしたが、特に同優が拔擢されて勤めたので五代目に種々と敎はりました。何しろ此の二人の松王玄蕃なら、源藏は九代目がしてよい處を鴈治郎が勤めたのですから當人も一生懸命薫陶を受けた譯です。後になつて本人の工夫も加はつてはゐますが基本は即ち五代目なのです。後の名優鴈治郎が劇聖五代目菊五郎に薫陶を受けたのですから、同優の源藏が無二の當り役となつたのも不思議はない譯です。此事は先年六代目が當地へ來て松王を勤めた時、源藏を演じた當人がしみ〴〵語つてゐました。

さて、小生が覺えてからの大寺子屋は、明治廿九年三月明治座所演で、菊五郎の松王、團十郎の源藏、福助（現歌右衛門）の千代、先代の秀調の戸浪、先々代片市のよだれくり、故松助の三助、故市川權十郎の玄蕃と云ふ配役でした。其後歌舞伎座で團十郎の松王、五代目の源藏で上演しましたが流石に名優同志、何れ劣らぬ出來榮えで當時の好劇家を堪能させたものです。此時には九代目が七代目の型といふので首實驗に刀を拔いたのが大分批難を受けましたが兎に角そのうまさは兩優相俟つて絶對のものでした。黑四天が源藏夫婦を取卷く、源藏がヂロリと其方へ眼をやると、黑四天の連中が菊五郎の一瞥に遇つて毎日すくんだと云ふ程です。其後松王は故人中車が得意とし、又現歌右衛門、羽左衛門、幸四郎、吉右衛門、故仁左衛門に故鴈治郎も演じてをります。六代目の松王は諸事亡父讓り、吉右衛門の源藏は中村宗十郎の型と傳へられ、兩優鎬をけづる名演技で東京でも御存じの通り二夕月續演した好評の舞臺です。

○

第三の『高時』は新歌舞伎十八番の内でも特異な狂言で明治十七年十一月猿若座の舞臺開きの中幕に初めて上演されました。其頃は團十郎の活歴熱が一番盛だつた時で、道具と云ひ衣裳と云ひ從來の形式を打破して獨創的演出をしました。是に對しては例によつて毀譽褒貶相半ばしてゐましたが、幕明きの上手の柱に後向斜めに坐つてゐる形などは曾てない演出として、五代目菊五郎が激賞したと云ふ事です。此折は秋田城之入道を仲藏、大佛陸奥守を故市川權十郎、衣笠を福助（現歌右衛門）が勤め、今の幸四郎が金太郎で侍女に出てゐました。明治廿年四月には

天覽を賜はり、五代目が陸奥守を、先代左團次が城の入道を、福助が衣笠を、故松助が長崎次郎をそれ〴〵勤めました。九代目は二回目の高時をその年の七月新富座で上演し、三回目を廿三年に京都の祇園館で上演し、明治卅五年十一月の歌舞伎座に最後の高時を上演しました。此時は大佛陸奥守を八百藏（故中車）、城の入道を先々代片市、安達三郎を家橘（現羽左衛門）が勤め、幸四郎が染五郎時代で天狗に、今度高時をする吉右衛門が侍女に出てゐました。當時團十郎は五十九才の老齢で天狗舞の件を大分省略しましたが、五色の電氣を浴せたりして種々新工夫を凝らしました。此興行は五代目菊五郎最後の舞臺で我々の忘れ得ぬ興行です。一番目に『八犬傳』が出て九代目は道節を勤め中幕に『太平記忠臣講釋』の喜内住家と『高時』があつて喜内と重太郎の父子で團菊が最後の顔合せをした譯です。二番目は菊五郎一世一代の辨天小僧で、此時菊五郎が病氣で倒れ今の六代目が僅か十七才の若年で代役を勤めて好評を博しました。其後『高時』は故中車、羽左衛門、幸四郎菊五郎、吉右衛門、三升等に依つて何回となく上演され其の都度好評を博してをります。今度の吉右衛門は實に數十年振りに勤める『高時』です。

○

第四の『娘道成寺』は寶暦三年（百八十五年前）の中村座で元祖富十郎初演以後多く女形が踊つてゐました。九代目團十郎が東京の歌舞伎座で二度目に上演したのは明治廿九年一月でしたが、此時には和洋合奏と云ふ破天荒な試みを用ひました。又現歌右衛門は東京座で道行から後ジテ迄上演した事があり、明治四十三年十一月芝翫からの改名狂言に東京の歌舞伎座で此の『道成寺』を出して不自由な身體を持ち乍ら見事に踊り拔いて、皆を吃驚させました。其後は六代目の專賣となりました。同優の『道成寺』については今更喋々する必要はなく、その完璧な藝は皆様夙に御承知濟の事ですが、今度半年振りの西下に際して、道行から後ジテ迄の長丁場を踊り拔く處に絶大の興味が繫がれます。其上吉右衛門の押戻しは一月の東京歌舞伎座所演が初

役で無論御當地では初めての役です。尙御存じでせうが此の『道成寺』は東京で二ヵ月打ち續けたものです。

○

第五の『盲長屋櫻加賀鳶』は明治十九年三月、五代目の爲に默阿彌翁が書卸した七幕からなる名世話物です。五代目が村井長庵をやりたがつてゐたのを、默阿彌が長庵より五代目の身體にはまる役を考へて書いたのが此の芝居の道玄です。そして道玄の外に五代目にきつてはめた鳶の梅吉と、三代目が演じたと云ふ死神を加へて趣向をこらして大評判となり大入滿員をつゞけました。松藏は故團藏が勤めて好評でした。後は先代家橘（羽左衛門の父）の巳之助、故岩井松之助のおすが、故松助の五郎次とおさすりお兼、先代菊之助の子守お民などで、特に松助の五郎次は非常な當りで、五代目歿後も持役として屢々演じ其の都度好評を博してをります。

五代目は初演限り一度も上演してゐません。明治卅九年四月の歌舞伎座で羽左衛門が初役で梅吉を勤めました。此時には道玄と松藏を八百藏故（中車）が勤め、故梅幸のおすが、訥升（現宗十郎）の巳之助とおさすりお兼に五郎次は書卸し同樣故松助が勤め、子守お民を今の六代目がしてその田舍言葉のうまさに見物を驚かせたものです。その六代目は明治四十五年三月の市村座で梅吉、道玄、死神の三役を初役で演じ、吉右衛門が松藏を勤めて、初めて書卸し以來の完璧な舞臺を見せました。

以後三役の中取分けて道玄は六代目得意中の得意藝として好評を得、幸四郎が一度帝劇で演じた以外は同優の專賣となつてをります。

尙羽左衛門と一座の時には梅吉を羽左衛門がして、同優が道玄と松藏をする關係上、質店の强質の相手を松藏でなく梅吉でしますが、無論之は松藏でするのが本格です。今度は市村座で上演の時と同じく、菊吉兩優で火花を散らす譯です。

○

第六の上の『五條橋』は『鬼一法眼三略卷』の五段目から系統を引いた竹本を地にした舞踊劇で友右衛門の辨慶は四年前東京で上演ずみのものです。

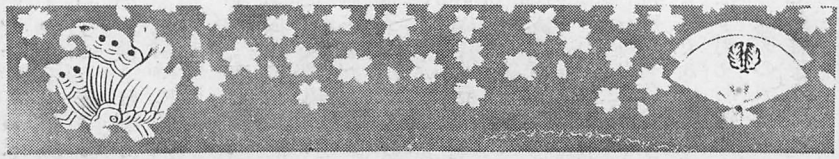
下の『芝翫奴』は文政十一年三月中村座で芝翫（四世歌右衛門）が演じた七變化の所作事『拙筆七以呂波』の內の『供奴』で『芝翫奴』とも呼ばれ中村家の家の藝となり先代芝翫（現歌右衛門の父）も亦之を得意としてゐました。現在では三津五郎が得意中の得意として好評を博してゐるものです。

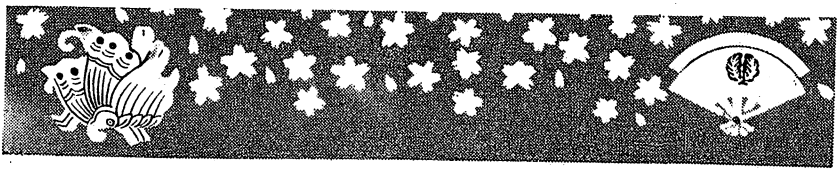
◆◆歌舞伎座菊吉の〝寺子屋〟◆◆

菊と吉

食満南北

菊と吉との合同劇は可なり前から觀てゐます。しかし私が一番面白く見たのは、二人の觀進帳でした。菊の辨慶に吉の富樫といふのです。どうです、どうお考へになります。面白いと思ひますか。吉の富樫が例の熱でグン〳〵押して行くと菊の辨慶がスツカリ肩すかしをくはすのです。よく私は其當座藍辨慶だと云つてゐました。つまり小意氣な辨慶なのですから面白いのです。問答のところで吉が『シテ又八つのわらんずは』とグン〳〵と押して行くと、『八葉の蓮華を踏むの心なり』とポンとスカスのです。これは似聲入でないと情がうつりませんが、それは〳〵不思議なものでした。私はこの二人ではやはり四千兩の堀ばたをとりたいと思ひます、如何にも二人の性格がきらめいてゐて、こんなのこそ二人をわづらはしてもいゝものだと思ひます、新作の場合はよくしりませんが大分面白相です、何にしてもカツキリ二人にはまらないと存外期待にそむくものだといふ事が申上げたかつたのです。





摑み合ふ菊吉

渥美清太郎

なんでも藝事は、競爭相手のあつた方が、進歩が早いやうである。お山の大將おれ一人では、天才もその鋭鋒を現はすのが遲いやうである。明治の團菊、現代の菊吉がその例である。その競爭にしても、別の座同志では双方ともそれほど感じないが、同じ座にあつて絶えず摑み合つてゐると、どうしても早く磨かれる。團菊然り、菊吉またその通り。

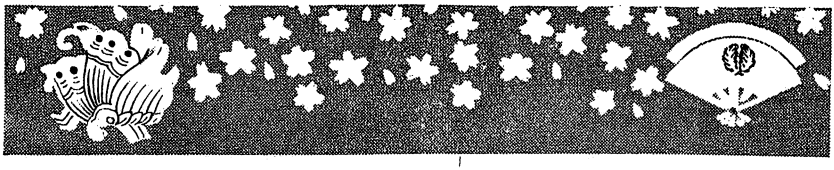
菊吉の今日重きをなす所以は、全く市村座時代に、競爭勉强した賜物であらう。

今度珍らしくもその火の出るやうな摑み合ひを大阪でやるさうである。芝居の面白いことは、誰に賴んでも太鼓判を捺してくれるだらう。

『寺子屋』で二人が摑み合ふ。この間東京で二ケ月續けた當り物である。團菊の時も役を替り合つたが、蠟阿彌氏の說では、菊五郎の松王、團十郎の源藏のはうが面白かつたさうだ。今度も菊五郎の松王、吉右衛門の源藏で、二人の間の火花はこの反對の時よりも、餘計に散るやうである。時藏の千代も研究してゐる。男女藏の戸浪も日頃貯へた技倆を發揮する。坂地の好劇家の期待に背かないだらうと思ふ。

『加賀鳶』は、勿論菊五郎の道玄と、吉右衛門の松藏が、ゆすり場の摑み合ひの面白さに力點が置かれる。菊五郎の世話物は、時に近代劇風の寫實にピントを合せて、默阿彌の樂劇と摩擦を生じること無きにしも非ずだが、この道玄に限つては遺憾なく默阿彌劇の巧さを見せてくれる。ツラネ厄拂ひの面白さを强調する。現菊五郎の世話物として、先代の特色を實によく受けつぎ、そして今の菊五郎の巧味の衣をかけた、好脚本であることを保證する。

吉右衛門の高時は、二人が市村座へ出て二度目の芝居にやつたぎりだ。その時は可成り若輩であつたが、藝が進み、貫祿がつき、大きくなつた優のこの役は充分に期待出來る。云はゞ封切同樣の物を大阪で先にやつてしまふのは、東京の人間には少々不服な位なものだ。前の時にも菊五郎は大



佛陸奥守で出てゐた。今度も同じ役だといふ。面白い。

菊五郎の『道成寺』も、『寺子屋』同様、二ヶ月連續のきはめつきのものである。道行がつくと殊に値打がつく。云ふまでもない、歌舞伎の『道成寺』は、道行と後ジテがついて初めて首尾一貫する。

道行で『戀をする身は』の艶麗な味と、クドキの後『只たのめ』以下の、外の俳優の踊らない個所の巧さと、後ジテの凄味とは、菊五郎の『道成寺』に就て特に御鑑賞願ひたいと思ふ。

菊吉合同劇

永田衡吉

もし全世界の演劇文化を代表するコンクールがあつて我國から派遣すべき劇團は、と問はれたら、私は速座に、菊五郎、吉右衛門合同劇と答へる。

この兩優のかもし出す演劇は單に國民演劇たると古典歌舞伎の傳統ばかりではなく、現代の感覺に深く喰入る清新さがある。人はともすればこの重大な點を見落して兩優を歌舞伎劇界といふ古い箍の中にばかり嵌く。しかしそれは大きな間違である。兩優は羽左衛門、幸四郎と言つた箍から一歩も出ない。出られない優ではない。

菊五郎の舞踊を見よ。それは古典歌舞伎の美を昔風に傳へてゐるのではなく、むしろ逆に現代人の感覺で歌舞伎美を把握縱横に氏の個性を生かしてゐると言ふべきである。またその世話物の技巧のうまさも單にうまいとか達者だとかいふ言葉では表現し切れないものがある。むしろ、そのうまさは氏が現代人のもつ鋭敏、纖細な感覺の持主であるから、さてこそその寫實伎が我々の胸を打つのだと私は思ふのである。

吉右衛門の豪壯、悲壯さは現下の非常時に緊張した國民なら容易にその日本的な特徴を認識し得るであらう。それは單に『藝』などと呼ばるべきではない、日本人の、東洋人のもつ民族的な悲壯味が吉右衛門によつて現代の舞臺に具現してゐるのだと評すべきである。(51頁につゞく)

二人は何處までも

中井浩水

（加賀鳶の松藏　吉右衛門）

菊五郎も吉右衛門も神經質である、たゞ菊は陽性で吉は陰性の相違、陰と陽との芝居私は昔の市村座の夢、菊吉合同の一手劇を待つこと久し、これに配する友右衛門、三津五郎、もうそれで澤山であるさうして彼等がやつて見たい芝居を思ふまゝにやらせたその熱演の舞臺を飽かず見詰め度い。

『菊五郎が大阪へ來ると又しても舞臺を投げる』などといふ迷信はやめて欲しい、そんなことを神經質の彼れの耳に入れるとそれこそ腐らせるもとである、腐れば自然に藝に響く、大阪の見物が大いによろしくない。

私は關東大震災以前、大阪時事にゐた頃、中央公會堂で菊五郎舞踊會を大阪時事主催のもとに二三回演じたことがある、社命で交渉に何度も上京した、菊五郎及市村座の小田村の相談役格だつた岡村柿紅君とは玄文社時代からの知人であつたから氏の盡力で話はいつも好調に運んだ、さうした緣で來阪した菊五郎にはその當時よく會つたが近年は部屋や旅宿を訪れるのもつい臆劫で久しく素顏の彼れを見ない。

吉右衛門に至つては一二度會つた切り、これは隨分と古い話、だから人間菊五郎、吉右衛門として記るすほどのスクープではない、たゞ私の友人二三から聞いた話位のものでそれも眞僞は覺束ない、けれども私は吉よりも菊に多くの興味を持つてゐる、役者らしい派手な生活、驕兒のやうな駄々つ兒のやうな半面と怖ろしく頭が好くまた感激性の強い彼、近代人のやうなセンスを多分にもち乍ら何とはな

く古い名人役者のやうな俤のある彼。

世間で立てる彼と吉との感情が何處まで信ずべきか、どうしてもこれからの歌舞伎劇は彼と吉と二人がガツチリ手を握り合つて眞劍に闘つて行かねばならぬ秋に際してゐる彼も吉も寛い心で融合つて行つて貰ひ度い、私は世間の噂などに耳は貸さぬ、それは丁度仁左と鴈との人氣盛りの時の二人の感情なり世間の噂なりと同じやうなものであらうと思はれるからである。

菊五郎は書を少々やるさうだ、吉右衛門の俳句は定評がある、菊五描き、吉これに賛句を書く、二人は一枚の半切で何處までも離れられない仲であつて欲しい。

（加賀鳶の梅吉　菊五郎）

尾上菊五郎

宇野信夫

宵闇の白菊ばかりのこしけり

去年の春、歌舞伎が滅亡するとか何だとかうるさいことが新聞や雜誌に掲載された時分、私は右のやうな句をこしらへた。知合の劇作家兼批評家が私にむかひ、得意になつて、

『いよ〳〵歌舞伎はダメになつた。ヒユネラル・マーチを奏しよう。』

といつたとき、私はその句をしめした。

朶雲梨園曙

＝中座と歌舞伎座＝

篠山吟葉

京阪の人が待ちに待つた、菊五郎、吉右衛門の大芝居が愈々今月は歌舞伎座に來た。狂言は序幕が『暫』つゞいて『寺子屋』其次が『高時』それから『道成寺』二番目は『加賀鳶』で、切の所作事が『五條橋』と『芝翫奴』。これなら上戸下戸おしなべて滿腹する、申分の無い建方である。

殊にその『寺子屋』は、東京の歌舞伎座で正月二月と打つゞけて絶讃を博した出し物である。菊の松王、吉の源藏は當代無比、完璧の『寺子屋』として各劇評家は一齊に推奬の筆を揃へた。

東朝の楠山正雄氏は「上方風の樣式的な『寺子屋』に對して、江戸前の現實的解釋の成功といへる」と謂ひ、且つ吉の正確なる演技を特に讃へられた。都の伊原青々園氏も『一日中での見もの、菊・吉も演出が正しく無駄な事をしない』と謂はれた。兩優のみならず男女藏の戸浪、時藏の千代も各紙に賞讃された。

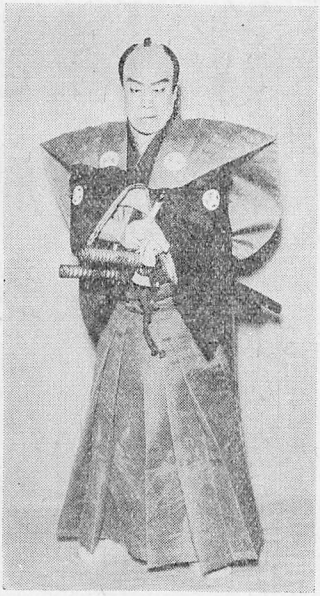
この『寺子屋』正月上演の際は源藏戻りからであつたが翌月引續いて上演の時は、寺入りから出して、子役の哀れを利かせた上に、これで情趣が加はつて千代の役も一層引立つと愈々好評であつた。今度の大阪でも是非寺入りから演つて欲しいと思ひながら此稿を書く。

菊五郎の『道成寺』は正に天下一品、これぞ正眞正銘紛れもない折紙附で、これも東京で暮の十二月と初春興行、仰山にいへば二年越し打つゞけた絶品である。十二月の時は花道の出からで、それも好評であつたが、正月には吉右衛門の押戻しが附いて、更に絶大な喝采を博した。

その他、吉右衛門の『高時』、音羽屋の加賀鳶梅吉など孰れも結構づくめの狂言揃へを向ふに廻して、さて中座今月の陣容も侮り難い。延若、魁車、壽三郎、長三郎、市藏の關西歌舞伎に、東京より宗十郎の來援を求めて、去年の

暮以來、各地で研究に研究を重ねた忠臣藏を、思ひ出の深い、頃は元祿十四年の櫻月夜を偲ぶ草に、一座奮迅の花々しい勢ひで、大序鶴ヶ岡より七段目、それに討入を附けて切は『保名』と『花見踊』の振事、總勢山と川との合言葉に勇戰奮闘の颯爽たる大一座である。

延若の由良之助は、扇ヶ谷の城渡しの門前に、血に染む亡君筐の短刀を屹と見つめて無念の思入と同時に、舞臺は五段目の山崎街道に變り、忽ち揚幕から與市兵衛の出になつて、舞臺の駕の前を行過ぎると、其駕から定九郎で現はれ、も一度舞臺が變つて與市兵衛と定九郎を又も早變りで見せる。これは昔日名人小團次ががが江戸に上つた時、忠臣藏の狂言が出て是非に由良之助といはれた時『私は座頭でも由良之助役者ではムりませぬ、私が演れば大工の由良吉あたりでムりませう。それでも强つて勤めろと仰しやれば致し方がムりませぬ。』と言つて、由良之助から與市兵衛、定九郎に變つて見せ、見物の度膽を拔いた型であるさうな。



これは一例であるが、中座の『忠臣藏』には未だ〳〵呀と驚かす神謀鬼策が含まれてゐやう、此稿を書く際は未だ舞臺も見ず、個中の消息は覗ひ知れぬけれど、歌舞伎座が鶴翼の陣形花々しい中へ、中座は魚鱗の備へ雄々しくも向ふのである。

殊にその中座では、延若の由良之助はいふ迄もないが、私は宗十郎の顏世御前、市藏の本藏に絶大の期待を持つ、大序は將軍の還御まで見せるさうであるから、師直の『早いッ』で若狹のムカツキを充分得心させられるし、從つて次の建長寺も引立ち市藏の本藏も一段と見榮えがする事であらう、宗十郎の顏世は押しも押されもせぬ大歌舞伎だ、兜改めもサゾ立派であらうと初日が待遠しい

時は彌生、浪花の春は正に花爛漫として、咲きも殘らず散りも始めず、花の雲客は中座か歌舞伎座か、ハテ麗かな眺めぢやなア。（寫眞は延若の由良之助）

大阪と祖父歌六

中村吉右衛門

この御時節に芝居が續きまして稼業の出來ますことは全く御國の御蔭樣と有難く御禮を申して、日々舞臺に精進して居ります。

さて大阪歌舞伎座四月興行に、六代目と始めての合同出演に際し、父から聞いた祖父のことにつきまして、思ひ出すまゝ申し述べさせていたゞきませう。

私の口から先祖の事を申しますのは、ちと烏滸しうございますが、祖父初代中村歌六は當地の役者で女形でございまして、その頃の名優三代目加賀屋中村歌右衛門の四天王と云はれました一人でございます。加賀屋の四天王とは、唯今の中村歌右衛門の祖父成駒屋中村芝翫（後に四代目中村歌右衛門）を始め尾張屋關三十郎、中村富十郎、祖父中村歌六でございます。

祖父歌六は傾城事が十八番で俗に傾城歌六とも云はれました。その頃の流行唄に『傾城歌六によしをは花よ、化け幽靈は菊五郎』と謳はれ、それには振りまでついてはやつたものださうでございます。殊に琴をよく彈きました人で、ある年江戸へ下りまして、女形で對面の工藤

を勤めました時、お約束の市松の障子をあげさせます前障子の内で少し琴を彈じてから『近江、八幡障子をあげい』と云ふ科白で障子があがりますと、脇に琴を置いていつもの通り控へて居りました。これはどこまでも女形の性根を忘れない爲めにさうしたのでございます。

その時祖父がさる御大名から、琴の上に紫の袱紗をかけましたのを拜領致しました、それ以來俳名を紫琴と改めたのでございます。

それに調子（聲）のよかつた人で、道頓堀の芝居をすまして弟子を連れて宅へあるいて歸ります、その頃私共の家は宗右衛門町にございました。太左衛門橋を渡りますと、橋の上で『ヱヘン』と大きな咳拂ひをいたします、その咳が道頓堀の川に響きまして、宗右衛門町の家まで聞えたさうでございます、すると宅では『サアお歸りだよ』と云つて、百目蠟燭をつけて出迎へます、その當時は唯今のやうに電氣も瓦斯もなかつたので、一ばん百目蠟燭があかるかつたので――平事から祖父はあかるいのが好きだつたので、殊更百目蠟燭をつけた譯でございます――そして祖母を始め父の米吉、伯父の種太郎の外女中達が玄關へ出て迎へます、それを見て祖父はよろこんで座敷へ通りました。

大層柄の大きな人で、非常に子福者で男女合せて十二人ございました、女の子はそれぞれ役者の家へ片附けました、その時分は役者同士で結婚させましたので、私の家でも松島屋、高島家、葉村家に片附けた譯でございます。

あまり子福者なので、七代目市川團十郎が祖父に向つて生きて居る内、太夫に法名をつけてあげると云つて〃昇雲院釋緣玉〃これは勿論、あまり子福者なので緣玉（ゆかりのたま）といふ法名をつけてくれました。祖父は七代目とは深く交際して居つたからでございます。

その祖父の大柄なところが私は似、又子福者のところは弟時藏が似たのでせうか、弟は唯ヲ子供が九人居ります、まだ若うございますから、これからさき祖父のやうに十二人の子もちになるかも知れません。私共は前申しあげました通り女形の家でございますから、時藏もゆく〳〵は女形で歌六の名跡をつがせる事になつて居ります。

私はこちらへ參りまして、祖父の命日一日（ついたち）と、父の命日十七日にはかならず、茶臼山の雲水へ墓參致しまして歸りには精進料理をいたゞくのを何より樂しみに致して居ります、元來菩提所は光明寺でございますが、なぜ雲

水に墓地を定めましたか、これにはかういふ話がございます。

昔、祖父は道頓堀の芝居を打上げますと、茶臼山へ參りまして保養したものださうで、その頃の今宮は唯今で申しますと、東京から箱根か熱海へでも行つたやうなことになります、祖父もよく靜養に參つたものださうですその當時雲水の和尚さんが大層歌六を贔屓で、何かにつけてよせてもらつて居りました、或る日碁を圍みながらの話の中に『和尚さん、私が亡くなつたら是非こちらにおいて頂きたい』と申しました、すると和尚さんも『好いとも、太夫にもしもの事があつた場合には是非お出なさい、私もさびしくなくつて話相手があつていゝから』と冗談のうちに約束をいたしました。後年祖父が天命を全うした時、前約通り雲水へ墓を建てまして、代々播磨屋の墓所になつた譯でございます。

この茶臼山も唯今は以前とちがひ便利な土地になり、且つ公園も出來四季を通じて、結構な所になりました。昔とは大變な相違でございます。

以上申し述べましたことは、生前父から聞いた祖父の話を思ひ出すまゝに書かせていたゞきました。

（昭和十四、三月、二十日）

近詠十句

家庭劇　元安折鶴

北風にまたゝく星の瞼にしみる

破璃戸打つ風あり山茶花搖れ止まず

寒々とネオンは鋪道の凍てに吸はれ

寒天に鐵鎚唸り兵器生める

ものゝ芽の土を破りて息吹きたり

春雨や磯路に光る貝の色

雪洞に雛は世紀の夢に在す

夕霞ケーブルの燈の上り行く

鶯や春のいのちを鳴きに鳴く

風の蝶生垣越えて流れたり

加賀鳶小咄

北川康男

大阪では珍らしい『盲長屋梅加賀鳶』が今度歌舞伎座の菊五郎、吉右衛門合同劇の二番目狂言として上場せられてゐる、原作は河竹默阿彌翁で明治十九年三月十五日初日の千歳座で書卸され、全七幕十四場であつたが今度上演せられるのはその内四幕で梅吉、おすがの件と話題の中心となつた死神が省略されて、菊、吉の道玄、松藏を主にした所のみをみせてゐる、大體この作は古老に聞くに、五代目尾上菊五郎が『村井長庵』をしきりにやりたがつてゐたのが、太夫元である守田勘彌がどうしても許さず、かへつて九代目團十郎に演せらたのですつかりお冠りとなり千歳座に走り、この替りに書いた狂言で、加賀鳶の喧嘩だけでは餘りあつさりしすぎると云ふので長庵をやりたがつてゐる菊五郎の乞ひに默阿彌翁が當時本郷にあつた盲長屋の熊阪道玄を書き込んだもので、素晴しい大當りをとつたと云ふことであるが何しろ作者七十一才の作であるだけに何處かにつかれがみへてゐる、しかし脚本を一貫して流れるめぐる因果の繰りからくりに默阿彌翁がねらつた勸善懲惡を外面から結末をつけてゐる。作としては今一つ秀れたものではない様に思はれるが心憎いばかりの用意周到な巧緻、驚くばかし行屆いた舞臺技巧には敬服させられると云ふもので、今度上場せられてゐない死神の件なぞは清元を使つた變つた趣向に當時意外の人氣を呼んだそうである。梅幸歿後おすがの件はカットされ先年來盲長屋中心となり、それに竹屋質見世のゆすり場がヤマとなつて、今度も菊の道玄、吉右の松藏で胸のすくような小氣味のよい江戸前の芝居がみられる事を樂しめる、それに大詰の加州侯門前の道玄捕物には一つの型を殘してゐる、菊の道玄の地味に安手な味がたまらなく適つて、加ふるに吉右の松藏のコンビで、大向ふをヤンヤと云わせる舞臺が目に浮かぶようである。

白井松竹會長の
滿支旅行に就て

冨田泰彦

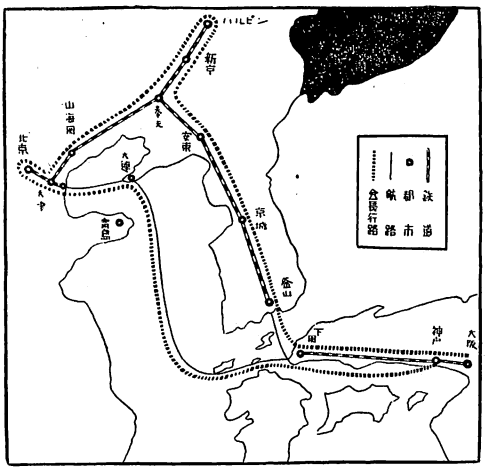
大陸へ、大陸へと觸手が伸びて行く日本なのである。この新東亞の態勢に順應すべく白井松竹會長が、花の四月、朝鮮から滿支への視察旅行に出られたことは、我が興行界未曾有の壯擧でもあり、『歌舞伎海を渡る』の具象化さるゝ日も近いと思ふ。

我國の大陸政策の興隆は、かゝつて人の問題であり、集團生活への發展には、文化と慰安とを必要とする處に異論はあるまい。如何に政府が、移民奬勵に各種の好條件を提示するとも、そこには砂漠の如き索寞として浸潤せざる生活面があつては、眞の『王道樂土』は建設されないのだ。——もつと端的に云はうならば、一日の享樂もなくては、人間は生きられない。鳥獸にすら花卉の薫香にうたひ、魚貝にも水温む春を待つのである。『演劇報國』を念慮とする白井會長が、今次の滿支旅行によつて、ます〳〵その使命を重からしむる何物かを體得して、歸來さるゝことゝ思ふ。所謂『長期建設』の分野は廣く、また、部門も多いが、前線の勇士の奮戰に續く宣撫工作の必要ある如く、先づ人心を倦ましめず、安んじてその生業に就かしむるの途は、斯うした演劇映畫の殿堂を荒涼たる戰塵の街にも築いてこそ、光輝ある理想の平和鄕が示現さるゝものと云はねばならない。

『藝術に國境なし』とは既に、云ひ古された言葉であるが、日滿支の親善も、かゝつてその興行政策に寄與する處は尠くないと思ふ。——恐らく白井會長の意圖も、そこにあつたことであらうが、それには猶幾多の犧牲を覺悟しなければならない。しかし百年の大計を樹つる上には、寸前の小利にのみ拘泥すべきではあるまい。

今更云ふまでもなく、亞細亞民族の牢固たる締盟は、眞の日本精神の昂揚に俟つべきものが多い。大衆指導の建前から、演劇なり映畫なりが單に民衆娯樂として、彼らの生活を豊潤にする心の糧となるばかりでなく、それらの題材を通じて、眞の日本の姿——それは外貌的のみでなく、情操的にも同化し得るよき機緣となるのではあるまいか、勿論白井會長一行の歸來を待たねば、果してどれだけの成算

と收獲とを齎し來るかは、容易に期待はかけられないが、松竹が、既に新東亞建設の一聯となつて、驥足を大陸へと展ばさうと云ふことに、先鞭をつけたゞけでも、決して無駄な、お座なり旅行とは見たくないのだ。私は、今後に具體化して來るであらう、松竹が大陸的興行法に、一轉期を示す日の多幸なることを只管祈るものである。



白井會長一行鮮滿北支視察旅程

1　三月廿三日(木)　大阪發午前一〇・四五下關着午後九・〇〇、下關發午後一〇・三〇、汽船一泊

2　三月廿四日(金)　釜山着午前六・〇〇、釜山發午前八・一五、京城着午後四・一五、(朝鮮ホテル)ホテル一泊

3　三月廿五日(土)　京城發午後三・二〇、汽車一泊

4　三月廿六日(日)　奉天着午前七・〇〇、(奉天大和ホテル)ホテル一泊

5　三月廿七日(月)　奉天着後五・一〇、新京着九・三五、(新京大和ホテル)ホテル一泊

6　三月廿八日(火)　新京滞在、(新京大和ホテル)ホテル一泊

7　三月廿九日(水)　新京發午後五・三〇、ハルビン着午後九・三〇(亞細亞號)(ニユウ・ハルビン)ホテル一泊

8　三月卅日(木)　ハルビン滞在(ニユウ・ハルビン)ホテル一泊

9　三月卅一日(金)　ハルビン發午前九・三〇、奉天着午後五・〇九(亞細亞號)(奉天大和ホテル)ホテル一泊

10　四月一日(土)　奉天發午前八・〇〇、北京着午後一一・三五(北京飯店)ホテル一泊

11　四月二日(日)　北京滞在(北京飯店)ホテル一泊

12　四月三日(月)　北京滞在(北京飯店)ホテル一泊

13　四月四日(火)　北京發午後一・四〇、天津着午後四・一五(芙蓉別館)ホテル一泊

14　四月五日(水)　天津滞在(芙蓉別館)ホテル一泊

15　四月六日(木)　天津午發前七・〇〇(長平丸)汽船一泊

16　四月七日(金)　大連着早朝午前六・〇〇頃(星ケ浦ヤマトホテル)ホテル一泊

17　四月八日(土)　大連滞在(星ケ浦ヤマトホテル)ホテル一泊

18　四月九日(日)　大連滞在(星ケ浦ヤマトホテル)ホテル一泊

19　四月十二日(月)　大連發午前一一・〇〇(熱河丸)汽船一泊

20　四日十三日(火)　汽船中

21　四月十四日(水)　門司着早朝(午前六・〇〇頃)下關發午前九・二五、大阪着午後七・五五、京都着午後八・三九　以上

忠臣藏の見方

森　ほのほ

『大序』抜きの忠臣藏が演じられたこともありますが、これは龍頭の脱れた兜も同然で、忠臣藏にとつては是非ともなくてならぬ場面です。後（三段目）の師直と塩冶判官の正面衝突も、この段で師直が顏世に渡す艶書の件から知つてゐないとピツタリ來ません。また若狹之助と師直の感情の縺れも既に此處から始まつてゐます。なほそれよりも見のがせぬのは幕明キの演出であります。

この幕明キは、他の狂言の序幕と違つて昔からやかましいもので鳴物、柝の打ち方、幕の引き方、總べてが古格を守らねばならず、東西〳〵の懸聲さへもピタリ嵌まつて行かねば本格で無いのです。幕が徐かに開きますと、直義、師直、塩冶、桃ノ井始め諸大名、仕丁に至るまで眼を閉ぢ頭を垂れて端然としてをります。それが淨瑠璃の文句に連れて、恰も魂を吹き込まれたやう、一人々々衣紋や居住ひを直すので、眞に莊重な感じのものであります。

二段目の本藏松切りは近來全く省略されますが、此度は此場の替りに、やはり本藏の松切りを見せる建長寺の一ト場が挿入されてゐます。これは禪を修めた若狹之助が建長寺に不時の參詣をして、床に懸けた七言絶句を見てから、それを考案として本藏と問答風の對談の末、師直誅伐の本意を明かす筋で、風變りの味のものです。續

ステーヂドア★スポツトクラブ

瀧蓮子

大朝連載「花咲く樹」のエマの役で超モダン振りを發揮して道頓堀マンをウツミンと呻らせた彼女は築地小劇場出身で、その後劇團新東京、築地座の新劇畑から關西新派結成に迎られ、次々にとそのウルトラ・モダンに驀進した彼女が近頃小唄と舞踊にお稽古に忙しいさうです、そして高島田に結つて樂屋入りをするさ

いて足利家門前、所謂進物場で、乘物の中に居るつもりの主人師直に對して伴内役者が獨芝居を演る處に可笑しさがあります。次の松の間の刄傷で不祥事を惹き起しさうであつた若狹之助は事無きを得反つて思慮分別ある鹽冶判官が大事件を起す處に面白味があり、威容あつて内心貪慾の底意地惡い師直、廉直で短氣な若狹之助、理性で感情を押さへ切れなかつた鹽冶それぞれの人物が能く描かれてゐます。以上が序幕で二幕目が清元のおかる勘平道行の濃艶な景事。三幕目は判官切腹から始まるが、判官には昔からの定まつた型があり、由良之助にも古名優が遺した様々の型があつて、此場も昔からやかましく、『出物留』と稱して客の出入り、飲食物一切の搬入を禁じた位であります。なほ此劇は襖の外にも、諸士、御臺、腰元、檢死役等の後景のシバヰが有るのに注意して頂きたいのであります

返しの城渡しは丸本の僅な文句から短いながら纒まつた一ト場面を創作した作者、演出者に敬意を表しませう。烏笛、本釣り(鐘)等の効果、二度三度と打返す城門の遠見。印象的な演出であります。

五段目の山崎街道も演出が優れ簡素な裝置、印象的な演技、正に木版畫の美しさであります。

六段目の勘平の悲劇はこれだけを切放しても立派な一ト幕物であります。今度は小團次が得意としたといふ與市兵衛、定九郎の早替りがあり、勘平が音羽屋系の用意周到な演出に興味があります。

七段目の茶屋場は昔から由良之助の見せ場とされてゐて、表裏二面を表現せねばなりません。宗十郎所演の脚本を轉用した爲か、各人物の會話は滑らかに運ばれ、人物それぞれも浮き出てゐます。また演出にも隨處に優れたものがあります。以下討入から本望成は省略します。

うです、何に番ですツて、それを云つては不可ません。

若葉蘭子

サイレン時代の映畫のタイトルに好く彼女の名を見出す事があつた、その映畫から梅野井一座に轉向した彼女は關西新派が結成されると同時に梅野井と共に參加、以來可憐な娘役として活躍してゐるが時偶丸番姿の女房役に廻る時もあるが、なか〳〵味がある實際の家族人になつてもさうだと思ふ、身體が弱いさうですから、折角お大切に……

山本かほる

AKで、聲の俳優を募つた時分、その聲の俳優として女學校を拔け出した彼女も遂にはその聲だけでは滿足出來得ず、昭和五年水谷八重子一座の入座、輕い明るい演技で、グン〳〵伸して、昭和十三年一月から關西新派へ參加先づ明るい近代的なオチヤピイ娘で活躍してゐる

延若の素描

◇…關西歌舞伎の闘將實川延若は大阪が生んだ名優である、口八町手八町とは正にこの人にうつてつけの言葉で、延若のかず〳〵の逸話も、はなしの種も、成功も、失敗も、舞臺も、家庭も、いろ事も一切この口八町手八町から割出されてゐると云つてもよい。

× ×

◇…樂屋の延若は機智に富んだ話上手で、ヨタを飛ばしたり、駄洒落を連發したり、朗かな面白い男である、そして大家ぶらず、到底大御所では治まつてゐない人で縱横無盡正に飛將軍と云つたたちで早く父に別れ、餘りにすいも甘いも知りすぎて、世事にうとい藝界人らしくない、數年前から和服をやめて當時では關西劇界只一人の洋服黨で大いにハイカラぶりを發揮した彼である、書まゝは一寸洋食とブラリと心齋橋の富士屋の階上で定食をぱくついて、ブラ〳〵部屋入する、歌舞伎俳優らしい重くるしさのない快男子である。

× ×

◇…その持ち前の愛嬌と器用さが時々舞臺では邪魔をすることはよんどころがない、アノ番頭善六式のイチビリがまゝ脫線する、その藝は廣く且つ淺すぎる。八宗兼學何でも御座れが今日災ひしてゐる

其舞臺を觀て微笑まない人は先づないでせう

小栗奈々子

水木流の舞踊を修めたと云ふから栗島澄子さんの門下だと直ぐ判ります、その彼女が昨年師匠の澄子さんに伴はれて關西新派に參加芝居は初舞臺に等しいといふに小太夫サン延見子サンの間であれだけの芝居が出來たのだから驚く今年はまだ十九、藝道專一に終業したら將來期待出來得る人、その爲めに、師匠の澄子さんが關西新派に預けて行つたといふ。

六條奈美子

大阪では第一劇場で活躍してゐた彼女は舞臺協會出身で、蒲田映畫、井上一座、松竹新劇界、新興成美團を經て昭和十年關西新派に加入、舞臺は主として良妻賢母型であるが、彼女の三校目も中々見逃す事が出來ない、部屋では何時も本を讀んでゐる近く長篇小說を發表すると力んでゐるが、なか〳〵好いネタが無いさうです、何誰かそのネタを提供してくれませ

延若の素描

鴈治郎にしろ、菊五郎にしろ、左團次にしろどんな相手にぶつゝけてもちつとも危つ氣のないのは流石に延若の爭はれぬ貫祿と藝の力で、打てば響くと云つた男である、鴈治郎亡き關西劇界を背負つてもつともつと活躍して貰ひたいものである。（酸甘郎）

×　×　×

器用で自負心が強く、何でも達者すぎる位にやつてのける意氣込みは感心するがそれだけにその手腕が災ひして傑出したものが少ないのは殘念である、それだけに又無意識な愛嬌が人を魅了する、云ふに云へぬ巧味と味をもつてゐる、

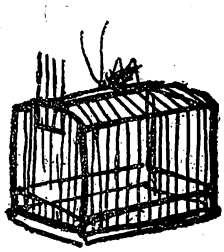
ん。

高木峰子

樂屋の廊下で大勢の子供を相手に喧嘩をしてゐるのは誰かと思つたら高木峰子さんですそれでも鏡臺前に坐つてゐると大人のやうな顏をしてゐます、映畫から早川雪洲一座に加入し昭和十三年の一月に關西新派に參加、若葉蘭子サンと同じやうな娘役好く松竹座やニユース館で彼女の姿を見うけます、なか〳〵勉强家です、但し漫畫を觀に行くのです。

市松延見子

猿之助一座に加盟してから市松と改名した彼女の前名は御案内の中山延見子、新舊合同劇への出演は前後二回であるが、その間その以前は自から一座を組織して、脚本から演出から事務まで自分一人でやると云ふ、女ながら天晴れプロデユサーである、踊はムロン歌舞伎畑のものなら何でも來いと云ふ藝達者、東京、名古屋の人氣は絶大なものである。



早野勘平の死の史實

―大阪に於ける唯一の遺蹟舊邸―

南木芳太郎

忠臣藏劇を見た人は、六段目の早野勘平の死に至るまでの煩悶心情に對して、何人も同情を禁じ得ないであらう、實際、赤穗義徒の中にあつて、快擧に參せず事前に止むなく自刄したことは洵に悲壯慘憺な事實として、誰もが一掬の涙を注ぐであらう、しかしその死の經緯については芝居と史實とは餘程の逕庭と趣を異にしてゐる。

◇

早野勘平の本名は萱野三平重實といつて、わが大阪府豊能郡萱野村字芝（阪急箕面沿線櫻井驛から東一里）の生れで、その生家は今も尙當時の俤を殘して、長屋建門構であり、三平が起臥して自刄したといふ八疊と三疊の二間も現存してゐる。

萱野家は淸和源氏の流れを汲み、世々攝津國の鄕士として由緒ある家柄であつた。父親は萱野七郎左衛門重利といひ、幕府の旗本大島出羽守に代々客分として仕へ、この重利時代になつてから俸祿八十石を以て家老格に取立てられてゐた、三平はその家に生れた三男坊である。

◇

元祿十四年三月十四日、巳の上刻（即ち午前十時）に江戸城殿中松之廊下に突發した凶變、それから四五時間を經過した申下刻（午後五時）に、第一の急使として萱野三平は早水藤左衛門と共に選ばれて、二挺の早駕籠に乘り、急を告ぐるべく江戸を出發、赤穗に向つた。行程百六十里の道中を晝夜兼行、僅か四日半で赤穗に到着してゐる。この早駕籠とは一時間に約一里半程度を走る早さのものであるが、これを急使驛傳といつて、驛毎に中繼して驛から驛まで驅けさせると、次の驛も亦宿駕をして之を受とり駕舁を促して又次の驛へ送るといふ方法であるから、急使に當る

ものは心身の疲勞衰弱はもとより眞に血を吐くばかりの苦痛體驗を嘗めなければならぬ、無論飛ぶやうに走る駕籠にゆられるのだから、中にさがつてゐる白布にしつかりとりすがつてゐないと危險である、身は堅く晒布で卷き、鉢卷をしてゐた。

◇

二挺の駕籠が宙を飛んで東海道を西へ西へと十七日の拂曉に漸く伏見の大塚屋といふ旅宿に到着、一足先きに依頼狀を出してあつた手紙によつて、大塚屋では用意して置いた早駕籠に早速乘換へて、淀を通り天王山の麓、山崎に入つて楠公訣兒の遺跡櫻井の里を過ぎ、高槻を踰えてよりひたはしりに西國街道を本陣のある道祖本から小野原を經て萱野村に入つた。時刻は正に三月十八日午前九時、この行程伏見より六里十丁餘、この萱野村を過ぐる時の三平の心情はどうであつただらうか、久しく見なかつた故郷の風物ましてや懐しき父母のゐます生家を眼のあたりに見た時、生家門前の邊りに人々の出入、往來繁しきに、こは只事ならずと直感したので、駕籠を停めて路傍の人に樣子を訊ねてみると、愕然として驚いたのは慈母の病死に際會したことで、それも今將に葬儀が行はれんとしてゐるところであつた。これを聞いた三平の心中は實に九腸寸斷の想ひであつたであらう、だが寸刻も爭ふお家の大事の前には私事は省られない、三平は涙を呑み張り裂く胸を心の駒にむちうちて遙かに合掌しながら駕籠を急がせた、かくて十九日早朝赤穗に到着、內藏助に具に報告してその儘赤穗に留まつて籠城組となり、直に同盟の列に就いたが、赤穗開城の後故郷萱野の生家に歸つて茲に始めて母の喪に服した、時に父七郎左衛門は隱居し、兄の重通が其後を襲ぎ、主人出羽守に隨行して長崎に赴いてゐた。父は三平が年壯にして浪々の身となつてゐるのが不便でならない、何とか他に仕官の道を講じやうとしたが、三平は復讐の念堅く、內藏助と深く誓つてゐるので私に肺肝を碎いて居た、所謂孝ならんとすれば忠ならずで、茲に進退谷まつて終に一死を以て亡君の地下に謝るのみと決心した。

◇

年は明けて元祿十五年一月十三日の夕、明日は主君の命日に當るので、この機に決行すべく密に遺書を認めて當時既に山科に隱棲してゐた內藏助の許に一僕をして屆けしめ身は齋戒沐浴して覺悟はしてゐたが、家人には、さとられないやうに談笑してその夜は床に入つた、翌朝八時頃になつても一向起出てこぬに家人は疑ひ出して臥戸を開いて看ると、東方に向つて端然と座し見事に腹搔切つて相果てゝゐた。

◇

この誠忠義烈の魂こそ日本武士道の精華ともいへやう、芝居や淨瑠璃では勘平さんは三十になるやならずにといつてゐるが、享年二十八歳、一說には二十九歳とも傳へられてゐる、十三歳の時、前記の大島出羽守の推薦により淺野内匠守の近侍となり、十二兩二分三人扶持を給せられ中小姓を勤めてゐたからもとより無妻であつた、それが歌舞伎ではおかるとのロマンスもあり、百姓與市兵衛の婿どのとなつて最後は氣の毒にも舅殺しの嫌疑を受けて、姑や同志にまで罵られ打擲されて、「汝許りが恥ならず、亡君の御恥辱と知らざるか、うつけもの……」と叱責され耐り兼て、勘平は諸肌押脫ぎ、脇差を拔くより早く腹にぐつと突立てるのが『假名手本忠臣藏』にある、この場面を歌舞伎に見ると、これから篠笛入りで『夜前獅五郎殿のお目にかゝり、別れて歸る闇まぎれ』云々のしんみりとした物語は憐れにも劇的効果としては充分に面白味を發揮してゐる、但し如上の史實から見ると、三平としては甚だ浮ばれない迷惑千萬な紹介となつてゐる。

◇

竹田出雲等がどうしてかういふ風に取扱つたのかといふと、泉岳寺書上げを土臺として脚色したに過ぎない、史實よばはりも今更でないからこれで止めて置くが、これに配合されたおかるは又實在の人物で、二條寺町二文字屋次郎左衛門の娘阿輕といひ、當時京洛に隱れなき絶世の佳人で、内藏助は之を側室として山科に圍ひ世人の眼を眩ます一手段にしたといはれてゐる。

◇

編輯子より大阪に於ける忠臣藏の地誌といふ注文であつたが、遺跡としてはこの萱野村の三平邸が唯一のもので、他は全部墓所であり、義士の行動についても餘り取立てゝ書く程の資料もない、これは又の機會に讓り最後に大阪市中にある義士關係の墓所を記して置く。

原惣右衛門の墓　天王寺區谷町八丁目、日蓮宗長久寺
矢頭長助の墓　此花區上福島一丁目、日蓮淨祐寺
（大石良雄の父權内良昭墓　北區天滿西寺町二丁目　曹洞宗　圓通院
大石瀨左衛門父八郎兵衛信澄墓）
義士墓　天王寺區六萬體町　曹洞宗　吉祥寺

天婦羅と
佛蘭西料理
喜久屋食堂
道頓堀
弐橋北詰
南75-1773
748番

『家庭劇』の一歩前

入江來布

三月一日より廿八日迄、中座に出演してゐた松竹家庭劇は、連日大入續きで、關西劇壇のトップを切り放しといふ、斷然惠まれた隆盛振りを示したが四月は今年初の東上とあつて、新作傑作の粒選り第一『嘘嘩賣買』第二『寒紅梅』第三『老中尉と犬』第四『日の丸をふる母』第五『赤い家青い家』を持つて、東京劇場に出演する。十吾、天外、淡海、小織、元安、森、高田を始め石河、宮村、小松、浪花等の女優陣もハリキつて大阪を出發した。

（編輯部）

一口に謂へば、松竹の『家庭劇』は近頃の社會大衆向として丁度頃加減のところである。近頃の見物層は、またそれを誘導しやうとする方面の希求も輕い心持で、明るく樂しんで觀て歸れといふところにあるらしい、西洋ものゝ映畫がハツピーエンドで青年層の人氣をとつてゐるのもその傾向に順應してゐるものであらう、或ひは映畫の傾向に見物層が順應してゐると謂つてもよい、新劇興隆時代に於ては『めでたし〳〵』劇は勸善懲惡劇と同列に、一も二もなく月並扱ひされたのであるがそれに近代的の『明るさ』と『朗らかさ』を注射すると忽ち今日の大衆潮流に乘つて勢ひを得たのである、社會の動きにもあるが、映畫の影響、青年層の愛好が芝居から離れて決河の如く映畫に趁つた影響が、本然には逆流と見らるゝ樂天觀が、『明朗』の衣を着て忽ち大衆の廣場に舞ひ出たのである、若し『家庭劇』が、一歩先きの前を察しやうといふのならば第一にこの青年層を把握した映畫の動向を看過してはならない、『家庭劇』に於て十吾の輕妙は、曾我廼家に十郎を失つて以來の至寶であるが、さりとて、いつまでも之れにたよつてばかりは居られまい。また、曾ての十郎も同じであるがこの種の輕妙は、持ち味が主力であるだけに何をしても持ち味に吸ひよせらるゝ傾きを免れない、これを調節して絶えず變化あらしめる周圍の役々、天外、淡海、或ひは元新派の參加諸優の動きが重要の關係をもつことゝなる、これらの人々も一向に新展開への動きを見せないとなると前途は少し心細くなる、

併し潑剌たる少壯の意氣と、老いてます〳〵元氣の諸君であるから、一つの展開路を見付たらその方への躍進を期し得られないことはない、石河薫、元安豊、小織桂一郎等諸勇將の活路が、そこに何かありさうに思ふ、その提案の一つに、それらの人々のための眞劍な一幕ものを入れるといふこともある、『明朗』の帽子を被つてゐる世俗大衆のなかへ、ほんの少しばかり、前途の匂ひをさせる一點の藥味である、併し、これはなか〳〵むつかしい註文だ、やり損ねては折角の見物層をこぼして了ふ、昔しとつた杵柄の新派流に還つてもいけない、相當至難である、だからと言つてこのまゝで居ても行詰りさうな氣がする、もう一つの主要な提案は、映畫の焦點をこつちへ移すことである、映畫はロケーションなり、セットなり種々の所謂近代的機構で觀衆に實在性を感じさせるから、悠々と夢幻境へも引ずつてゆく、この呼吸を生きた舞臺の上に、一つだけでもいゝから盛り込む工夫はないかといふことである、尤もこゝにいふ映畫の焦點を生きた舞臺に移すといふのは所謂これまでの連鎖劇や、『映畫と芝居』の聯合をやれといふのではない、映畫のもつ實在性と夢幻境との味をもつものをそつと、人知れず一狂言づゝ加へてゆくといふ方法である、謀りごとは密なるをよしとす、露骨に見物にこの呼吸が知れては所謂狂言の底をわるの亞流となるから、內輪だけで、內輪さへも意識せぬうちに、その方へ一歩を歩み入れることに依つて、『次ぎの見物層』へ繋り得ると思ふ、特殊劇を標榜しても、脂氣が利きすぎて、あとに絞り出しの感動がつゞくやうなのは『これでもか劇』や『くすぐり劇』と大差はない、幸ひにして『家庭劇』にはその粘り氣がないのは何よりも嬉しい、この特長はどこまでも捨てずに、而も次ぎの見物層へ繋つてゆかうといふのだから註文は大きい、但し註文は大きいやうに見えるけれども、この劇團に粘り氣がなければこそこの大きな註文に順應し得る可能性があるとも言ひ得る、さうして見るとあまりかけ離れた方角違ひの註文でもないらしい。

慧眼なる十吾君あり、老練なる小織君あり、美くしい石河丈あり、文藝部に人もあれば、本社側にも帷幕あり、やつてやれないことは決してない、『家庭劇』今日あるのも或るときは馬蹄も見えぬ山脊を踏み進んだ苦行の成果であらう、關所はこゝ一つではない、この程、元安君と二十年ぶりで圖らず逢つたときにも、ふとその感を浮べた。

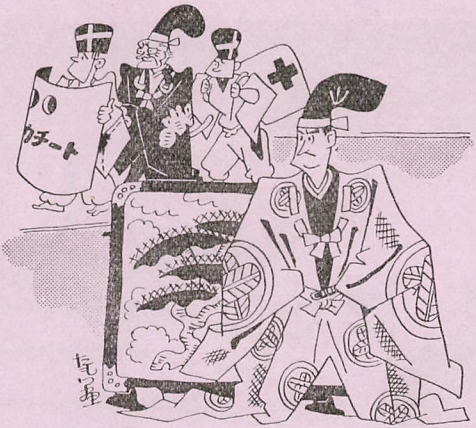
映畫ファンの青年層にも、いまある動きを仄見することができる、何かを期待してゐる。嘱望々々。

春爛漫
歌舞伎
漫画調
ショシクセーラカ♡ソ
どうとんぼり
設建期長
大阪マンガ会
酒井七馬♡大槻たもつ♡正木彦♡

漫畫手本忠臣藏三題

大槻たもつ

判官「高家のものゝしき警備隊、殘念ながら今日のところは見逃してやると致さうワイ」



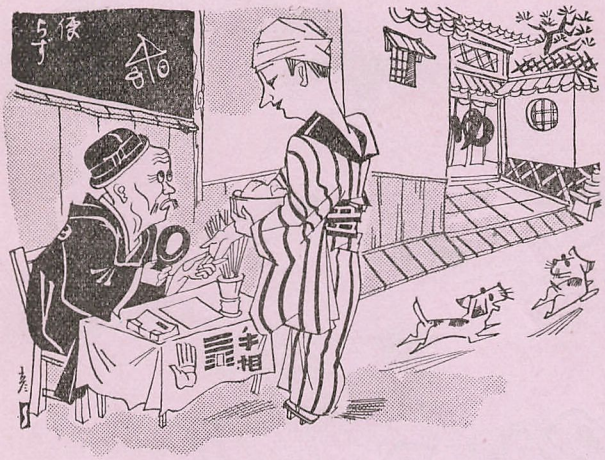
伴内「駄目々々、このダツトサンは二人も乘せられねえんだヨ、そつちの女子一人キリゝ置いて消えて失くなれツ。どんなもんだい」

與市兵衛「勘平か、あの洋傘ギヤング奴、この千人針の腹卷を五十兩とでも思つたか、へへそゝつかしい奴ぢやテ」

勘平「……」

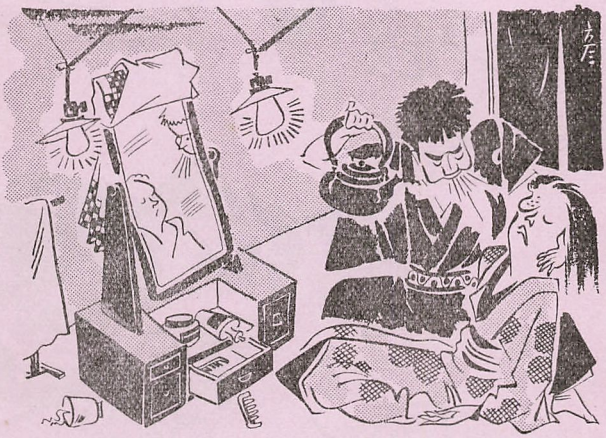
◎見損つた辻易者　正木　彦

鑢湯歸りの女形の手を握つて易者君「奥様御歳は？」と來た
道は名優……！



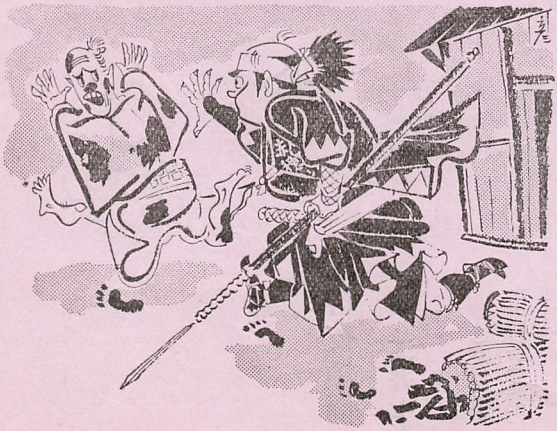
◎名きやつぷ

出來過ぎたメイキアツプ到々御自分の顏を
見て氣絶しちやつたお岩さん
そこで伊右衛門君が介抱したと云ふ話
何だか妙だ



◎異説忠臣藏

大體吉良が炭小屋から引づり出されたと云ふのは嘘で、實説では彼自身が隙を見て飛出した處が、着て居た白衣が炭に汚れた爲純白の雪中に目立つたのが運のツキで彼として米倉に逃げ込む積りだつたと云ふ事だそれが爲め白裝束であつても死ぬ爲の用意では無かつたとの事



日夜煩悩

酒井七馬

神速變化極まりなきわが荒鷲に日夜悩まされる蔣介石！

（高時の天狗舞ならぬ蔣介石テンテコ舞）

關西歌舞伎の反逆性

鷲谷樗風

われ〳〵の、生活意識に、一つの、うるほひと、ゆとりを、あたへてくれる娯樂機關、そのなかで、特に、しばゐを、とりあげて、かんがへてみると、女劍戟、大衆劇、新劇、新派、喜劇、歌舞伎等が、あらゆる、かくどから、しばゐの世界を、はなやかにしてゐる。これらの、いろ〳〵な、しばゐが、關西では、どんなぐあいに、流行し、發展し、又ほこりを保つてゐるだらうか。

まづ、そのひとつ一つを、ひろつてみると、女劍戟では不二洋子その他があるが、關西のものではない。唯ひとつ女劍戟の花であつた大江美智子が、わかくして、あつけなく世をさつたのは、かへす〴〵も惜しいことである。大衆劇、主として、男けんげきの意味に、かいしやくしたばあい、これも、關西には、とりたてて、ふいちようするものがない。ただ、籠寅興行が、大阪に、ちからをいれることになつたので、こんご、これが、どんな風に、芽生え、みのるかは、われ〳〵の、たのしみである。

新劇は、新築地、協同劇團、文學座劇團があるが、だいたいにおいて、新劇は、關西の水にあはないといへる。遲々として、その、ぜんとに、ひかりをながめることが、はなはだ、遠いのである。したがつて、關西の新劇あいこうしやは、わづかに、年何回かの公演がおこなはれるばあいこの、かつを、みたすよりほかはない。新派は、東京全新派が、大世帶をもつて、むかしながらの、新派の世界に、たてこもつて、時代の光りを、やや、かみして、ふとい線をゑがいてゐる强氣に、かんしんさせられる。由來、關西は、新派發祥の土地である、それでありながら、今日ではみるかげもなくおとろへてしまつて、去年ほろびた、關西新派が、かぶき畑から、市川小太夫を、あたまに、かりてきて、新舊合同劇と唱へて、新派の臭ひをだしてゐる。われ〳〵は、その舞臺を、東京のそれと、くらべ、思ひあはせて、いつも新舊合同劇が、バラ〳〵な、氣分をだしてゐることに、ふかい、ためいきをつくのである。ナゼこんなに、ちからのない、バラ〳〵なんだらう。と、どなりたくなるのである。にごり水のなかに、ものを、もとめるやうなもので、とうてい無駄な、しごとではあるまいか。

しからば、關西には、しばゐの、ほこるべきものはないか、われ〳〵は、ソコに、五郎劇を發見し、最近、すばらしい、勢ひで、びようばんになつてゐる、家庭劇を、みいだすのである。人生の、うれしい、かなしい、おそろしい感情のさまざまが、こころにくいまで、ゑがきだされる、五郎劇と家庭劇は、しばゐの世界に、關西のほこる、二つであるのである。

つぎに、歌舞伎はどうだらう。鴈治郎歿後、ファンは、第二の鴈治郎を、きたいした。東京に、たいこうして、はな〳〵しく關西劇壇をたかめるものは、だれだらうか、きんちようした、きもちで、ながめられてゐたのであるが、一ねん、二ねん、三ねん、つき日は、いたづらに、ながれてきた。

實川延若、中村梅玉、中村魁車、坂東壽三郎の四頭目はたゞ、しばゐをしてゐる。二圓いくらの、しばゐや、東京俳優の、さん加で、お客をよんだ。しかし、そこに新味も努力も、熱情も、はつけんすることが出來ない。關西ファンが、この人たちに、求めたものが、みたされず、またぶたいに、あたらし味をだして、觀客の胸奥に、せまる迫力もない、時には、おなじ狂言のくり返しをみせられる。われ〳〵が、がくせいのころ、すりこぎあたま、といふのがあつた。このあたまの持ち主は、いつも、まじめに、おとなしく、べんきようしてゐた。

しかし、あたまを、きようかしよや、字びきとくびびきさせると、まず〳〵ちしきが殖えるのではなく、だん〳〵ちゑが、へつてゆく、奇妙な、あたまである。われ〳〵はいまのやうな舞臺に、努力してゐることは、丁度、すりこぎあたまであつて、關西歌舞伎の、ほんとのちからや、うでを、見せることが出來ずに終るのではないかと、しんぱいするのである。そして、へりゆく、すりこぎの興味なさには、ファンは、いよ〳〵關心が、もてなくなつてゐる。われ〳〵は、子供のときに、毎夜、狼が來たと、町の人をおどろかしてゐた子供が、ほんとに、狼が來たとき、たれも、たすけて、くれなかつた童話を、きいたことがある。この童話のやうな、せんでんに關西歌舞伎が、おちてゆくことを、われ〳〵はおそれるのである。

いま、四頭目をのぞいて、若手俳優のなかで、たれに聲援すべきであらうか。その一つの例として、前進座の翫右衛門の演技と性格表現に、われ〳〵は、いくたの、共鳴點を、見出すことができる。

しかも、彼は一個の大部屋であつた。翫右衛門のやうな熱と力の藝道精進、これを關西のわかい人達に、もとめても、われ〳〵は、しつぽうを得るだけのことである。もちろん、俳優ばかりを、責めるのは、無理である。この人た

ちを動かす企劃に、大きな、けつかんが、あることは否めない。

すべての文化事業において、壓迫でない、ちみつに、調査され、統制された、企劃の權威が、ひつ要である。しばゐに、おいても、その企劃が、政治、經濟、社會の、うごきと、ながれに、沿ふて、そのより良き隨伴者となり指導者となり、共鳴者となり、慰安者となることに、するどい努力が、たいせつである。そこに、ホントの演劇報國が、うまれるのである。づさんな、ドグマに、この報國は輝かしく、うまれるものではない。

この缺點、この弊害を、關西の俳優たちは、よく知つてゐる、知つてゐて、知らぬ顔の、半兵衛さんを極めこんでゐる。

これは、一ばん、ものの、發達と進歩を、破壞する原因である。

總てを知つて、ちんもくを、まもつてゐるほど、おそるべき、反逆はないのである。われ〳〵は、若し、こんにちのまゝに、關西歌舞伎が、推移したならば、十年を、まつまでもない、近いうちに歌舞伎はその光りを、うしなつてしまふだらう。果して現狀にまんぞくして、消極的な反逆を、祖先から、ほこるべき上方歌舞伎の傳統に、つづけてゆくことは良心的に、できるものでないと、われ〳〵は信ずるのである。

關西文化の樹立の上に、しばゐの世界、殊に歌舞伎のほこりを更新する『感激』を、まづ關西歌舞伎の俳優たちに、望みたいのである。感激！文字は二じであつて、いろ〳〵、ふかくよろこばしい意味をもつてゐるではないか。

新舊合同劇は どこへ行く

菱田正男

（小太夫）

（梅野井）

角座に旗揚げ以來、關西劇界に活躍してゐる〃新舊合同劇は〃今後どうなるか――

こうした標題を示されたが、一體あの劇團に永續性がありますかとお伺ひしたい位である。

歌舞伎俳優もおれば、新派或ひは新劇の出身者もおり、實にいろんな方面の人物をよくもこれだけ……といひたい位集めてゐる、責任者の庄野元章氏の氣苦勞も並大抵ぢやなからうとお察しするが、こうした寄合世帶だけに、そこに自から統一がとれなからうと心配する、強いて統一させやうとすれば歌舞伎は歌舞伎、新派は新派と、それ〴〵出身者を分けて、各々得意な狂言で働かせるより外なからうと考へる、そうしたプランの下にいつも芝居を開けてゐては結局行き詰まつて了はう。

小太夫と梅野井の演し物、笈川と瀧の演し物、中堅連の演し物と、のべつに同じ並べ方では觀客は飽くより外あるまい、こうした將來の見えすいた興行政策を今後ともつゞけて、〃客が來なくなれば解散させやう〃といふ肚ならば、我々は何も言はずに成行を見てゐる外仕方がないしハツキリ云へば〃勝手になされ〃である。

けれどもこの劇團をうまく育てゝ、往年の關西新派の轍を踏まさず、關西で成功させやうといふのならば絶對的によき指導者がほしい、その指導者も從來の關西新派の如き情實に囚はれず、公平無私の人でありたい、こんな月並なことを言ふほどのこともないのだが、かうした混合世帶になると、えてして情實による紛糾を釀し易い虞があるからである。

その上ではじめていろんなプランが立つのではなからうか、〃新舊合同劇〃といふ名稱もあまりにあざとい、これらも永續させる上において何とか考へたく思ふ、脚本も現在のやうでは感心せない、關西劇壇に筆を磨くお歴々を動員させることは勿論だが、ひろく作を求めて、一層俳優を勉強させてもらひたいと希つてゐる。

（小波）

（笈川）

仰げ護國の神品

東京九段　靖國神社

遊就館特別展覽會

四月一日より五月十五日まで

會場石清水八幡宮境内

主催　中部防衛司令部

榮光燦たり各聯隊の武勳を物語る

輝く我等が郷土部隊

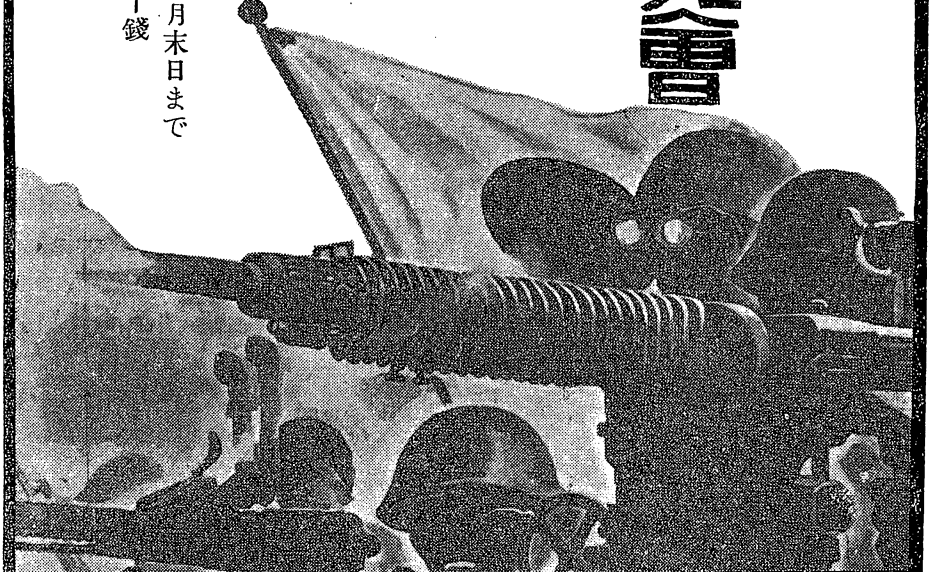
武勳博覽會

於　ひらかた遊園　四月一日より五月末日まで

入場料　大人　五十錢　小兒　十錢

武勳博入場券付割引乘車券　大人　六十五錢

遊戯館、武勳博連絡券　大阪より　一圓



のりば

天六

天滿橋

京阪電車

春はビールだ
ビールの春だ!!
アサヒビール
一等國の一等品
宮内省御用達
大日本麥酒株式會社

工業
經濟 最高指針 日刊十二頁

株式會社 日本工業新聞社

取締役社長 前田久吉

大阪市北區堂島濱通四丁目
電話福島(45)七五一
五七二番

面白い映畫は興新

興新

伏魔殿

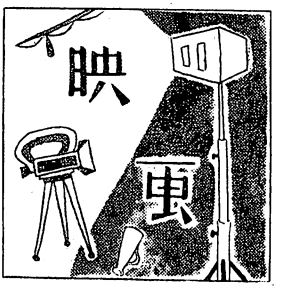
山路ふみ子　眞山くみ子　草島競子
河津清三郎　美鳩まり　松平龍子
新田實　高野由美　瀧鈴子
松竹大船　夏目初子
菅井一郎　葛城文子　高倉惠美子
堀川涙之助　平井岐代子　清川夏江
鳥橋一平　古川登美　金澤美都子
大川修一　高津慶子　他總動員
奈美乃一郎　浦邊粂子
押本英三　歌川八重子
高木八郎　劇團
村上英治　山崎とも子
高島敏郎　久慈行子
豊川好純　戸川純子
錦町慶爾　旭のぼる

新興東京が絶大なる自信をもつて贈る良心的格映畫
明治末期の名優阪東力枝の涙と苦難の藝道を描く春の絢爛豪華篇！

原作・佐藤紅綠
脚本・依田義賢
演出・田中重雄
〃・須山眞砂樹
撮影・行山光一
美術・水谷浩
錄音・茂原英朗
音樂・中川榮三
和樂・杵屋正八郎
時代考證・池上秀畝
構成指導・喜多村錄郎
演技指導・中村梅花

新興東京撮影所超豪華版

近日封切
乞御期待



映畫界放談

玉木潤一郎

◆戰時下の興行街

映畫と云ふものは一種の文化事業でありながら、永い間、特殊的な眼で見られ、一方でファンを增す數と同じ樣に、片方ではいはゆる識者達に輕蔑され無視され更に認めてもらふ事が出來なかつた。それが映畫の前身活動寫眞の昔より我が國に渡來して幾十年になるか今年はじめて、やつと映畫法と云ふものが問題となり遂に映畫法案が上程され、愈々制定される樣になつて來た。その永い間、手をつけられなかつた我が國の映畫が、いかにのんびりした悠長なものだつたかを考へると齒がゆくもなるが、とにかく認められたのは大いに喜ぶべき事である。

映畫法の中にはまだ〳〵文句を云ひたい處もあるが、鬼が出るか蛇が出るか、それは今後の事にまかして今はさしひかへておこう。しかし、從來までは、映畫人が一般人を相手にして來たが、これからは全然反對に政府當局が映畫人を相手にする時勢になつて來たのだから、總べてが簡單になる事だらう。

さて今次事變勃發以來、一番大きい打擊を蒙むるのは興行界であると憂慮されてゐたのに反して、昨年から今年にかけ我が興行街の成績は實に素晴しいもので、皮肉にも戰時以前に見られない程の一大活況を呈してゐる。

この興行界の盛況は何に原因するかと云へば、銃後國民の確固とした統制のとれた云はゞ世界最秀國の餘裕綽々たる心構への現れが壞滅を豫想されてゐた興行界に大きなサーチライトを點じた樣に健全なる日本國民の最適の慰安場として興行街が俄然活況を示して來たのであるが、更にもう一つ忘れてはならない事は、歐洲某々國の如く、戰爭と娯樂は別なもので戰爭の反面にはかならずユウウツがひそんでゐるのだから、それを發散さすためにはどんな極端な娯樂も自由國の事だから政府に何の遠慮會釋もないと云ふ樣に突拍子にも淫らがましい映畫、演藝をたくみにおり込みそのデモクラシー的な赤裸々な娯樂場街風景とは違つて、我が國では事變以來、いかなる貧弱な場末の小屋でも、又藝人でも現下非常時精神の緊張を一日でも忘れる樣な者は一人もなく、映畫と名のつくものゝ大半はこぞつて時局精神を娯樂の中におり込み慰安の中から國民精神の宣揚につとめてゐる。これが、すなはち昨年末より今年への興行界活況の最

も大いなる原因であると私は信じてゐるのである。

◆洋畫異變

しかし、前記した興行界の隆盛はひとり興行者のみの力でない事は無論、一般大衆の力と政府當局の鞭撻によるものであるが、それとゝもに政府當局の映畫に對する烱眼の廣さは想像に餘りあり御苦勞の限りである。

その一例として一昨年、洋畫ファンをしていささか寂寥の感をあたへたが、映畫が文化躍進の教科書の一端ともなる場合を考慮して昨年秋第一回の洋畫解禁を行つた。しかしこの洋畫輸入解禁にいたるまでの邦畫の發展は目ざましいもので洋畫がなくとも邦畫のみでなんの遜色もなくやればやれるものと云ふ信念を我々に示してくれた。又洋畫をあつかふ事のみを自分のたつた一つの天職だと狹陋に考へてゐた洋畫業者及び洋畫專門館主に、洋畫がおとろへても早速路頭に迷はぬ樣あらかじめの轉業智識を暗示してくれたとも云へるだらう。

しかし、一ケ年の洋畫飢饉の間に政府では三、四回の洋畫解禁說をほのめかして、洋畫ファンを糠よろこびさせたので、愈々本當に解禁となり新しい〃天晴れ着陸〃〃踊る騎士〃が輸入され上映されてもファンは古物だと思つて一向に寄りつかず、その上前記の二作品が同じ樣にアメリカ映畫特有の浮はついたドタバタものなので、緊張すべき非常時局にこの映畫は何事だと大した不評判。とんでもない大不當りの珍現象を呈して洋畫業者はその當座、輸入禁止された時よりも驚いたと云ふ事である。

しかし、やがて〃ハリケーン〃において洋畫のスペクタル映畫のおそろしさを、更に〃シカゴ〃では映畫企畫の豪華さをまざまざ見せつけられ、日本映畫の作品に投じる處の製作費の貧困さを嘲笑されてゐる樣に感じられてきた。

◆強くなつた映畫會社

だが、物は考へ樣によつてどうとも云へるもので、日本作品で見る事の出來ない前記の樣な大スペクタクル映畫は、日本で莫大な馬鹿げた巨費を投じてつくらなくても、外國でちやんとつくつてくれて日本作品を見るのと同じ位ひの觀覽料で見せてくれるのだから、日本でわざ〳〵つくる必要もない譯で、考へれば一種の資源愛護を日本映畫界はやつてゐるのだと云へよう。してみると政府當局でも洋畫を目の敵の樣にして彈壓を加へる程の事もないだらうと私は信じてゐる。

さて、これから愈々大スペクタクル映畫の出來ない日本映畫界に入るのだが、たとへ大スペクタクル映畫は出來なくとも我が邦畫は獨特の良さを發揮して日增に向上をとげてゐる。

それの何よりの證據として、映畫法が出來る樣になつた今の映畫界を昔とどう變つて來たかについて一言云つてみたい。

映畫スターと言へば從來は突如として彗星の如く現れ、演技が下手だらうが人格がなからうが、たゞ美貌でさへあれば一躍天下の大スターとなり昨日の乞食が今日の大名で、何故えらくなつたかも知らず、英雄の如く威張りちらして會社に對しては給料を上げてくれなどとイナオつたり、隨分身の程知らぬ話だが、それでも會社側はおどろいて要求を通してまだその上鼻息をうかゞつてゐるのだから益々もつて手に負へなくなり、皮肉な話だが一儲けしようとどこからか探してきた寶物の

ために結局青息吐息をつかなければならない妙な破目に落ちこんでしまふ會社がいくらもあつたものだが、現在では、そう言ふ不合理な會社は絶對にない。

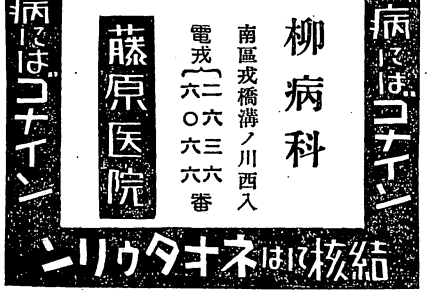
その最も好個の例として本年正月早々問題となつた新興スターの無斷アトラクション事件がある。

無斷で滿洲くんだりまで實演に出掛けていつた藤井貢以下四スターらも、別に惡氣ではなくたゞ先輩連がやつて來た樣に「うやむやむや」を受け繼いで行つたのだらうが、彼等の行動については觸れぬ事にしてこの問題を處理した處の新興東京の態度について宜べたい

それは實に立派な態度であり、日本映畫史上に特筆しても、決して冒瀆にならぬであらう。新興東京にしてみれば藤井、逢初、立松の三人は名實ともに第一線スターでありピカ一である、そのために彼らの主演映畫には金をふんだんに使ひ、宣傳には莫大な費用を投じて賣つてゐた、それ程大切なスターであつたが、今回の事件は映畫スターとして實に唾棄すべき行爲であり破廉恥である、映畫スターの人格向上のため見せしめとして、斷々乎として馘首してしまつた事は流石大松竹プロツクに屬するだけの威容に感服するとゝもに新興自體の最近における目覺ましい躍進發展ぶりと白井信太郎社長の指導よろしきを得てこれに附屬する城戸副社長、野村大阪支店長永田、六車兩東西撮影所長始め全員協力一致して整然なる統制が布かれてゐたからこそ敢へて馘首斷行が出來得たのであらう。何はともあれこの問題が映畫法制定を前にしてかくの如く善處された事は欣快にたえないが、以上の如く現在の映畫會社は昔と違ひスターシステムから漸次企畫本位へ乘り出して來たのである。と言ふのは映畫會社が變つて行くのと同じ樣に映畫ファンも變つて來たからでどうしても企畫本位でなければならない時勢になつて來た。そこで前記した新興映畫の最近の目覺しい發展ぶりを參考に企畫の重要性について語つてみよう。

◆企畫の重要性

從來、撮影所と云ふ處は、晝が夜か夜が晝か混沌として區別がつかず突拍子もない頃に撮影開始したりするのが藝術家の本城と言ふ誇りをもつて撮影所の本質とされてゐた。そうした非常時局下にそぐはない惡弊を敢然と打破つて新しい統制のとれたシステムを樹立すべく新興京都では、夜間撮影廢止、日曜日公休制、時間勤務制と目覺しい刷新を斷行して業界者の注目を惹いてゐるが、此新システム下で製作される映畫と言へば、猫を筆頭に猿、狐、狸とおよそ動物園の引越しの如く化物映畫を製作して業界者を呆然たらしめてゐる。しかし、これが實に新興映畫の延びる原因の一つで、この製作に當る監督やスター連に一言不平も言はさずに巧みに指導して行く永田所長の手腕も偉大なものであるが、こう



した化物映畫をつくつてゐる反面では、「吉野勤王黨」の如く本格的歴史映畫や、「實説佐渡おけさ」の樣に日本古來の美風を宣揚した民謠を主題とする良心的鄕土映畫等のバラエティに富んだ作品を續々放して好評を博してゐるのは、實に企畫本位の成功で新興映畫隆盛の最大原因と言はねばなるまい。しかし何と言つても化物映画は大したもので、いかに最近の映畫ファンに迎合されるか、たとへば浪曲映画の擡頭、漫才映画の隆盛、又洋画ではヘニア・ソニーのスケート映画、アステーア・ロジヤース・コンビのタップ映画等、いづれも映畫藝術の本道をそれたアトラクション的見世物的映畫であるがこれが歡迎される時勢となつて來たのであるから化物映畫の受けるのも無理がないわけである。

こうして映畫ファンの意向が變つてくると同時に、ファンの映畫に對する豫備智識も非常に發達してきた。あるひは神經過敏になつて來たとも言へよう。しかし、それは今までに映畫會社が良い作品であらうがなからうが盛んに實に無責任に矢鱈無鱈にぢやん〳〵宣傳した結果で、だがこれは會社としても賣らねばならぬ商品であるから仕方がないが、ただ最近のファンはその手においそれとは乘らず言はば實質本位映畫でなければならなくなつて來た。それにはどうしても整然とした企畫が必要で折角堂々たる監督作品でスターバリューもある映畫が失敗した例がいくらもある。

惡るい參考に引合せて恐縮であるがこれも參考の一つであるから許してもらひたい。最近の日活映畫〃袈裟と盛遠〃がその最も良き例であらう。轟夕起子、江川宇禮雄、嵐寛壽郎と言ふ實にすばらしい顔合せに、監督は稻垣浩、マキノ正博と當代時代劇監督の第一流處、これだけのメンバーでつくつた映畫ならどんな事があつても面白い映畫が出來、大當りをとらねばならぬ筈であるが、事實は期待してゐた程の事もない。此の直接の失敗は、此の映畫が僅に四日間でつくられたものであると宣傳してファンに短時日でつくられた映畫だと言ふ事を先入主にしてしまつた事で、ファンならずも誰れもそうであるが、この映畫製作日數は一年間だと言ふのと四日間と言ふのと大した相違であり、こうなると出演者や監督は問題でなく、一年間もかゝつたのだから愼重に愼重を期してかならず良心的な責任をもつてつくられた映畫だらうと思ふし、四日間と言へばたとへ責任をもつてつくられたとしても粗製濫造な無責任な映畫だと思ふのが人情で、どれ程いゝスターや監督でもファンの方で二の足を踏む樣になる、結局これは企畫の失敗で僅々四日間の製作日數しか豫定出來ない企畫をたてた事が最も大きい不當りの原因であるとゝもに、ファンがいかに實質本位的な映畫をのぞむ時代になつて來たか判る譯である。

◆檢閲官樣々

それと同時に、映畫にとつては最も恐ろしい處の檢閲のお役人さんの眼が變つて來た事である。

最近の松竹京都の井上金太郎監督「月夜鴉」はその良き例であらう。この映畫は歳若い弟子とその師匠の歳上の女の戀愛を描いたもので、中年者が見るとあらゆる處に胸のうづく樣なキワドイ官能描寫があり、さながら「梅どよみ」を見てゐる樣なアブナイ映畫であるにもかゝはらず、ノー・カットで檢閲通過となつた。此の非常時局下にこうした情緒映畫は當然上映禁止が都合よく行つて膾の如く無

茶苦茶に切られるだらうと思つてゐた連中をアッと驚かせた。と言ふといかにも檢閲官に眼がない樣な譯になるが、事實どうして檢閲官の眼は先の先まで判つてゐるのである。この「月夜鴉」は簡單にポカンと畫面のみを見てゐたので前記した樣な映畫であるが、この映畫の主題となり精神となつてゐるものは實に燃ゆるが如き熱をもつて藝道に精進する若者の意氣を描いたもので、戀愛はたゞそれに附隨したものであり、しかも不純でなかつたと言ふ點と二つの愛が一つとなつてあるものに精進したと言ふ點において、單なる戀愛映畫でないと言ふ處から、無論、井上監督の素晴しい、良心的演出にもよるが、ノー・カットで許可されたもので前記の、日活映畫「袈裟と盛遠」でもこの例で、歴然とした人妻の三角關係を描いた作品であるが結局最後の「袈裟こそ日本一の貞女である」と言ふ處からノー・カットで通過するなど今後は思はぬ映畫が保留されたり、推薦されたりする事になつてくるだらう。と、これで私の放談記も一應結末がついた譯であるが、最後に於いて最近隆盛の映畫と競つて素晴しい躍進を見せ正に往年の黄金時代を復活を豫想させてゐる松竹京都について次の樣な言葉を呈した。

林長二郎脱退後の下加茂は火の消えた如き有樣であつたが、今日のこの旭日昇天の活況は副社長白井信太郎氏が自ら製作擔當重役と乘出して以來の努力による事と松竹唯一の大人物井上常務の燃ゆる如き愛社心が今日を築いたのであるが、更にもう一つ忘れる事の出來ないのは前所長篠山克巳氏である。

篠山氏はまつたく椽の下の力持ち的な損な役割を演じて來たが、この人が所長當時最後の仕事として入社させた川浪良太郎が、昨年「菩薩の眉」でデヴュー以來、目下撮影中の「兩國梶之助」にいたるまで僅に九本の主演映畫で、往年林長二郎の賣出し以上の物凄い勢ひでぐん〳〵のし上り今や時代劇スターの王座を占めようとしてゐる事は、活氣横溢の松竹京都に更に一段の光彩をそへるものであり、やがて來るべき下加茂黄金時代こそ川浪良太郎の活路舞臺であると全國館主から絶大な希望をもたれてゐるが、此の川浪を發見した人が篠山克己氏である事を知つてゐる者が今はたして幾人あるだらう。長二郎脱退後の下加茂を挽回さすべく東奔西走して効なさず無爲のうちに放つた最後の一彈、川浪良太郎發見が今日かくの如く實を結んだのも皮肉であるが、篠山氏の所長當時の人知れぬ苦勞に對してでも、川浪發見の功績は廣く認められてよい筈である。

繁華街に近く、交通至便
閑雅な和洋室！
◎モダン階上浴室新設◎
南地ホテル
一宿 一半 二圓 三圓
憩 半額
南地戎橋電停前
電話南四一四・四四一

コロムビア映畫超特作

わが家の樂園

原作
戯曲 ジョージ・コウフマン
モス・ハート

脚色 ロバート・リスキン

監督 フランク・キャプラ

―配役―

アリス・シカモア……ジーン・アーサー
トニー・カービー……ジェームス・スチユアート
老ヴアンダアホフ…ライオネル・バリモア
エシー・カーマイケル……アン・ミノー
ペニー・シカモア……スプリング・バイントン
エド・カーマイケル……ダブ・テーラー
ポール・シカモア……サムエル・ヒンツ

下世話に申す『金を持つて死ねるものぢやなし！』

この町人哲學を、黄金萬能のアメリカの大實業家ヴアンダアホフ老が、或る日、エレヴエーターの中で思索したから乙である。『一緒に持つて行けるぢやなし』――即ち、その箴言が、この三百萬弗映畫の題名だから、愈々以つて！心機一轉、老實業家は斯界を引退、既に三十年、悠々自適してゐる。因みに老ヴアンダアホフに扮するライオネル・バリモアは、ちよいと先代仁左衛門に似た『持味』で動くので非常に愉しい。

で、この老人は樂園を「わが家を中心」主義に生活してゐる。

ところで、このわが家の系圖――。長女ペニー――女流畫家、郵便物の間違ひが動機で閨秀劇作家に轉向す。

その良人、ポール――花火製造。助手デピオは昔氷の配達夫をしてゐたから、花火が爆發しても心配はあるまい

二人の間の愛娘エシー――菓子製造業。仕事の餘暇にバレーを習つてゐるその舞踊教師は以前レスラーだつたさうだから、その踊は双葉山でも倒しか

ねまじい。

さらにこのエシーの良人マイケル──自習自得、得手勝手流のシロホン演奏家。並びに、素人印刷業、兼、花火と菓子部の營業部長。

末娘アリス──カービー軍需工場副社長、快活なトニー・カービーの女秘書を勤務。

まづ、ざつと、恁んな一氣には覺え込めない大家族である。

ところで、若き副社長の父親カービーは、事業家の老將で、その工場附近の民家を買收する大劃策を立てゝゐるが、老ヴアンダアホフが、住民の困窮に同情して、十萬弗で買收申込みをしてゐるカービーの意企に頑として應じないのである。

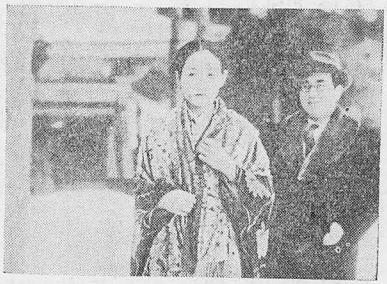
そこで潜航運動として、副社長トニーは兩親同伴で、ヴアンダアホフ家訪問の卷となる。その時、その家の光景は、エシーがシロホン伴奏でバレの練習中、ペニーは氷配達夫をモデルに繪を描いてゐる。誠にもつて復雜極まる場面。その中へカービー一家が參加したので、十を掛けてやゝこしくなつちまつた。遂に、失禮極まる誤解は不穩分子の集合所と間違ひられ、警官隊の闖入があり、事態最悪の狀態へ誘導して、哀れ、名門ヴアンダアホフ家とカービー家の一群は、その夜、留置場で慄ひ上らねばならなかつた。が、其處でも、カービーは、富の問題に就いて堂々該博なる意見を吐露して黄金主義を讃美して、ヴアンダアホフに苦虫を嚙ませたものである。

この大事件があつてから、快活な副社長を此の上の困惑に陥れることを憂ひ女秘書アリスは家出を敢行する。がアリスなきヴアンダアホフ家は花なき淋しさが漂ふばかりだつた。それで御老體、他の家へ引越して新生活を營む佗しい決心である。

これによつて漁夫の利を占めたのはカービーだ。念願の大合同軍需工場の敷地が易々と獲得できるのだ。その野望實現、目捷に迫るの吉報に不拘、なんとなく氣持ちがカラリとしなかつた殊に、大合同契約調印の席上、狡猾と非友誼的な、列席の人々の面構へを見廻してゐると、全く、ヤになつてきたのである『一緒に持つて行けるぢやなし！』この感懷こそ、三十年前、老ヴアンダアホフが體驗した心境と同一である。で、あつさりと事業界を引退することにした。

わが家戀しさに、アリスが戻つてくると、引越最中である。そこへ野望家から白紙に還元したカービー老が駈付けて引越中止を命じ、ハーモニカを取出してヴアンダアホフ老と二重奏の感興に夢中になつた。

兩家の確執はさらりと解け、こゝにモダン・ロメオとジユリエツトなる女秘書アリスと快活なトニーが笑顔を交したことまで説明すれば、もう蛇足である……。



大船超大作

春雷

原作　加藤武雄
脚色　柳井隆雄
監督　佐々本啓祐
撮影　渡邊健次
音樂　早乙女光
美術　濱田辰雄

□配　役□

井出愼之助……夏川大二郎
弟　謹助……三井　秀男
津川志津子……川崎　弘子
母　せつ……葛城　文子
東條　英子……木暮實千代
父　雄作……藤野　秀夫
大庭　和彦……廣瀬　徹
櫻井　讓次……黑田　達夫
（新興より應援出演）
今野　俊雄……近衞　敏明
大江千代子……田中　絹代
（川崎弘子大幹部待遇昇進を祝ふて特別出演）
會計課長井口……笠　智衆
赤松　惟彦……奈良　眞養
志津子の友鳥子……松井　潤子
佐田　老人……宮島　健一
その妻お民……青山万里子
パトロン土居……縣　秀介
貸間の小母さん……高松　榮子
英子の家の少女……梅園きよみ

事業の失敗による父の自殺は、大實業家の一人娘英子華やかな生活を急變し、イタリーへの音樂修業も夢と消え、單なる市井の一女性として殘された英子の家庭教師である井出愼之助は、故郷から彼を頼つて上京して來る許婚者志津子の純愛を感じながらも、英子の美しさに惹かれてゐた、そしてその愛情の混乱は偶然な運命の機會によつて豫期だにせぬ事件へと展開した。

上野驛へ志津子を迎へに行つた愼之助は、戀人大庭の不當な要求から逃れて來た英子に救ひを求められ、一應彼のアパートに伴ひ、再び驛に引返した。一瞬の差で志津子は喜びと憧憬にあふれて愼之助の部屋を訪ねたが寢臺に横たはる英子を見て驚き、そのまゝ街頭にさまよひ出た、失望と悲歎の志津子にのびる誘惑の手は百里の道も遠しとせずひつこく彼女に迫る今野の愛慾であつた。夢に愼之助の愛を求めうつゝに今野の腕を感じるわびしい志津子に突然母危篤の報がもたらされ彼女は今野と故郷へ歸つた。意識不明の母は今野を愼之助と信じくれ〴〵も志津子の將來を託して逝つた。一切の事情を知つた愼之助の弟謹介は兄を慕ふ志津子の爲に義憤を感じ兄に對する眞實の忠告を用意して志津子を追つて上京した。その頃愼之助は英子の爲に會社の金を流用し警察の手に引かれて行つた。英子も又レコード會社の流行歌手となり日夜享樂の生活を送つてゐた。愼之助を求める謹介と志津子に未だ幸福の機は迫らず。再び愼之助が刑を終へて社會に出た時、彼への純愛を忘れぬ志津子によつて温かい部屋が用意されてゐた。不遇の彼を省みない英子の態度に比して變らぬ志津子の優しさが愼之助の悔悟と更生の生活へ導いた。愼之助は謹介と共に志津子の行方を探したが意外彼女は行方不明であつた。更に志津子を求める今野愼之助を追ふ英子の姿が、海のない港の波濤の中に明滅した。そして……

京都大作

兩國梶之助

川浪良太郎
伏見信子　主演

原作　鈴木彦次郎
美術　小村雪岱
脚色　冬島泰三
演出　片岡清
撮影

□配役□

兩國梶之助……川浪良太郎
遠州屋重吉……高松錦之助
女房おまき……岡田和子
娘　お琴……伏見信子
佐久間象山……志賀靖郎
大日方四郎兵衛……大川六郎
蟻川　大助……大東元
千代川……山路義人
清田屋おはま……伏見直江
住吉屋染吉……久松三津枝
虹ケ嶽抽右衛門……新妻四郎
白玉音五郎……尾上多見太郎
伊勢海五太夫……關操
猪王山（大關）……南光明
大碇……結城一郎
米平……石原須磨男
熊さん……廣田昂
小さん……最上米子
花助……人見芳子
菊勇……白河富士子
おゑん……花岡菊子
おひで……國春美津枝

嘉永四年秋本所回向院の本場所然も今日は千秋樂、勝ちッ放しの強豪人氣絶頂にある二見ケ浦が秋葉山に破れて土がついた、物凄い興奮が渦卷いて割れる樣な騷ぎだ相撲狂で通る染物屋遠州屋の重吉この番狂せを吾がことの樣に殘念がつて歸つて來ると町内の佐久間象山塾の下男金平が待つてゐた。金平は相撲取になりたいのだ、あらゆる場合、誰にも負けたと思つたことがないと云ふ佐久間象山に棒押しで勝つた金平はこの力で天下第一流の相撲取にならうと先づ親がはりである重吉に相談に來たのだ。重吉の娘お琴は好きな金平が相撲取になる事を喜ばなかつた。だが親爺の重吉そんな事を知る由もない、金平の申出に大賛成ですぐさま佐久間象山とも相談して呉れてその骨折りで兼ねて顔見知りの白玉音五郎の部屋へ弟子入りする事が出來た。今では玉柳の名を貰つた金平の天下第一流を目指しての修業が始まるが金平入門の折その事に就て一言も師匠白玉から話がなかつたと云ふので兄弟子虹ケ嶽は事毎に金平に辛く當るのだつた。或時は毆られ或時は蹴られ乍も第一流になるんだと金平齒を喰ひしばつての我慢だ。その有樣に同情したのは雷ケ谷、未だ稽古もつけて貰へない金平を何かといたはり自分の弟子千代川と一緒に稽古をつけて呉れるのだつたその頃遠州屋の重吉一家は段々と落ちぶれて娘お琴は柳橋へ藝者となつて出なければならなくなつてゐた。次の兩國の本場所、突然親方白玉は卒中で倒れ金平は羽振りのいゝ伊勢の海部屋へ引取られることゝなり、名も梅ケ枝と改め、永い間の辛苦も漸く實を結び、三段目に昇進、更に二段目、遂に十兩にまで躍進した。或夜料亭柏屋に兄弟子達と招ばれてゐた金平、すつかり見違へる樣に立派な關取になつてゐた。前からこの梅の枝に惚れ込んでゐた藝者染吉、今夜もまた醉ひつぶれて、うるさく金平に云ひ寄つてくるのだつた。持て餘した金平が廊下へ逃げ出した時バッタリ顔を合せたのは藝者琴次となつてゐるお琴だ。――懷かしさに金平に話しかけやうとしたが何故か琴次は逃げるやうに外へ飛び出してゐつた。〈相撲取を夫に持てば江戸や長崎國々と……新内流しが聞えてくる川端、琴次、柳にもたれて淋しさにたまらず泣きくずれてゐる。後追つて來た金平聲をかけようとした　が咽喉まで出た聲をグウと飲み込んだ。金平の出世のため何もかもあきらめねばならない――琴次は悄然と泣き濡れて去つて行く。見送る金平斷腸の思ひでヂッと後を振り向いて終つた。この未來の人氣力士兩國梶之助、今は梅ケ枝の金平、後から後から涙が流れ出る瞳を、星のまたゝく大空へ向け、サッと兩手を高く擧げ叫ぶのだつた。「そーだ俺は天下一流になるんだ、屹度なつて見せるぞ！」

新興キネマ京都撮影所總動員

阿波狸合戰

脚本　八尋不二
演出　壽々喜多呂九平
撮影　川崎新太郎
音樂　高橋半
錄音　武井正二郎

□配役表□

小松島の金長……羅門光三郎
庚申　新八……尾上榮五郎
屋島の禿狸……荒木忍
亭主鳶の六兵衛……松本田三郎
新古橋の定九郎……寺島貢
川島の作右衛門……芝田新
藤ノ木寺の鷹……伴淳三郎
津田の六右衛門……東良之助
高須の隱元……光岡龍三郎
赤池緋鯉之介……南條新太郎
淡路の柴右衛門……尾上松緑
屋島の八兵衛……片桐恒男
高田の八藏……水野浩
多度津の役衛門……市川海老三郎
千切の高坊主……川崎猛夫
あはずの七兵衛……櫻井勇
やらずの八兵衛……矢野武勇
藤ノ木寺の小鷹……ツネ公
乳母おむつ……歌川絹枝
鹿の子姫……高山廣子
臨江寺のお山……別府花子
勢見のお與津……大久保とし子
大和屋茂右衛門……香木葛一
女房おむら……梅村蓉子
番頭　万助……東堂圭八郎
丁稚　亀吉……伊庭駿三郎

（京都撮影所總動員）

こゝ阿波の德島は今昔名物の阿波踊り、搔き立てる樣な三味の音に、娘も若者も心もそゞろである。その夜こそ、道塞した紺屋茂右衛門が愈々懷しい德島の町夜逃ばせねばならぬ晩だつた。然し世の中は一寸先きは闇と云ふ、計らずも助けた一匹の狸のため、翌朝は夜逃げどころか、店は押すな〳〵の門前市をなす大繁昌。その助けた狸こそは本篇の主人公、小松島の金長なのである。

× × ×

小松島の金長親分、男つ振り、いや狸つぶりなら、化けつぶりなら、難のうちやのない今賣出しの若親分だが、惜しいことには狸の世界での位と云ふものを持つてゐない。この位を授ける、言はゞ司家とも言ふのが津田の舊家六右衛門狸である。晴れた朝、送らるゝは金長親分と乾分藤ノ木寺の鷹、見送るは金長一家、その中に混つて鳶の一人息子、惡戲盛りの小鷹が別れの腹鼓をうちながら叫んでゐる。「大人しく待つてゐるから早く歸つてお呉れようッ」かくてハツキリ金長颯爽と津田屋敷へ

× × ×

人の世でも戀に上下の隔てはない、主六右衛門の愛娘鹿の子姫を想ひつめた川島の作右衛門は、狸に取つては恐ろしい煩惱の犬を追ひも得やらず、或夜姫に迫つたが折惡しく金長の乾分鷹に妨げられ剩さへ姫が意中には凜々しい小松島の若親分の姿が刻み込まれてゐるのを知つて、嫉妬に狂つた狸、――これは大分やゝこしい――遂に畜生にあるまじき隱謀をめぐらした。

× × ×

沖洲の濱邊では、今し結ばれる二つの魂――笑つてはいけません金長の鹿の子姫も決してランデブーにあの瓢輕な狸姿で出かける程心得のないことはしません、賴もしげな勘平と、可憐なお輕と云ふ乙な御兩人の姿です。片や戀に狂つた腹黑狸、川島の作右衛門の佞臣に迷はされた津田の六右衛門殿娘をたぶらかし家重代の寶物、麺麭の一卷を覗ふ憎ツくき金長奴、まるで人間みたいに油斷のならない狸野郎奴と言ふわけで眷屬共を引き從へ沖洲に向つて押寄せた。

× × ×

「親分ッ、父やんはッ？」小鷹に言はれて沮潛然、身に數傷を蒙つてやつと逃れ歸つた。「仇はきつと討たせてやるぞッ」ワイプすると音樂につれて乘込み來るは、喧嘩支度も勇しい金長一家の面々

喧嘩の場所は勝浦川原。

戀に泣く鹿の子姫の運命は果して如何に。可憐小鷹の親の仇、川島の作右衛門は？そしてこの狸界始つて以來の大喧嘩を本邦狸界の大御所屋島の禿狸は何と見たか。

食味街

今月は大衆的な道頓堀の食堂を覗いて見ませう。何といつても大阪名物「出雲屋」は、文字通り大衆的の親玉です。藤澤恒夫の小説「花粉」にこの「出雲屋」のまむしが出て來ますが、あの鰻の燒具合とタレの味加減は此處獨特の奥技をきわめたものといへるでせう。中座前、相生橋畔、千日前といづれも芝居歸りや映畫の歸りには便利な食堂です。それから戎橋の「柴藤」も名物の一つですが、こゝは船で有名になつてゐるやうです。然し隣接の「ライオン」階上ではランチタイムなんかを拵へ鰻の新時代化なんてシヤレてゐますよ。同系の食堂「かどや」は道頓堀千日前角にあつて、こゝも大衆的ですが、二階には高級グリルがあつて人氣を呼んでゐます。それに魚すきもあり、肉すきも出來るなんて、食味テバートです。

喫茶街

シネマやシバイに輕い疲勞を覺えて、巷へ出るとまづ一杯の紅茶でもと咽喉が鳴る。その喝をいやしてくれるものに、近頃は喫茶店が隨分と殖えてゐるやうです。そこらの著名なのを拾つて見ますと、中座前の「白水」と「イスズ」があります。白水はデンバーなぞといふサンドヰッチを賣物に時間待や人待に好適の場所。イスズにはおぜんざいやおぞうにがあつて風變りな店です。それから戎橋筋へ廻ると、「ブラジレイロ」「平野屋」などあります。ブラジレイロはにがいコーヒにカナッペなどが專門。平野屋はフルーツパーラーですから精々新鮮な果物の御注文をなさるがいゝでせう。それから新進では新東洋の「ダイヤ」があります。橋筋の南海寄りと千日前に店があつて午前二時頃迄營業してゐます。

(13頁より)……

斯く兩優は日本の過去と現在の國民的特性を把握してゐると思ふが、たゞ最近の兩優に遺憾なことは未來の國民演劇に屬する新作歌舞伎への熱意が不足してゐるのではないかと思はれることである。特に菊五郎氏に望みたいことは世話物の世界のみを追求せず、往年『阪崎出羽』や『信州義民錄』などの一番目物を取りあげてインテリ性の新作へ邁進したあの勇氣を取戻して今日の圓熟な至藝で一段の生彩を發揮して欲しいことである。

三月の

(1)松園桃子終演

昨夏九州から現はれ、俄然大阪劇壇の人氣者となつた女劍劇の松園桃子も、浪花座を根城として新大衆劇に邁進、小波若朗を相手役に颯爽たる舞臺を姿見せてゐたのが去二月限り松竹との契約を一旦打切り、籠寅の手で名古屋で新一座の旗擧をした。

(2)チンピラ登場

その後の浪花座へは中野興行部の中野弘子に一座の女劍劇と、これはまた可愛らしいチンピヲ劇團の來演である。その名の如く、十歳前後の俳優ばかりで、これがやくざ物や勤王物で大人洗足の大芝居をやつてのける。四月は京都神戸の松竹系に出演。

(3)大入百連勝

双葉山は百連勝を目指さして、壯途半ばに破れ、日本一にキズがついたが、こゝに劇團の日本一が完成した。即ち關西に生れた松竹家庭劇の大入百連勝であるこの正月歌舞伎座出演以來三月中座へ歸演、四日を以て目出度く百枚の大入袋を出し祝賀式を擧ぐ。

文樂座人形配役

四季壽

一、男萬歳　吉田玉幸
一、女萬歳　吉田榮三郎
一、海士　桐竹紋十郎
一、海女　桐竹正ゞ龜
一、關寺小町　吉田小兵吉
一、鷺娘　桐竹紋十郎

紙屋内の段

一、紙屋治兵衛　吉田榮三
一、女房おさん　吉田文五郎
一、丁稚三五郎　桐竹紋司
一、舅五左衛門　吉田玉藏
一、娘お末　吉田文枝
一、悴勘太郎　桐竹門司
一、紀の國屋小春　桐竹紋十郎
一、江戸屋太兵衛　吉田玉德
一、五貫屋善六　吉田多三郎

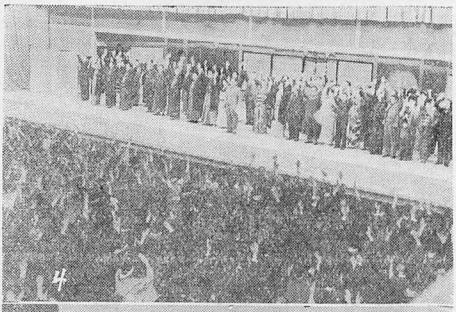
北渡しの段

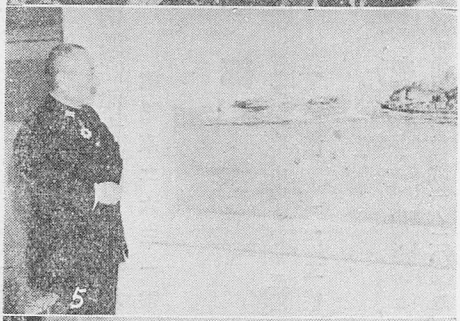
一、大判事清澄　吉田榮三
一、後室定高　吉田文五郎
一、入鹿大臣　桐竹門造

アルバム

(4)内親王御誕生

三月二日午後五時、號外の鈴の音も目出度く、大内山の奥深く内親王御誕生の報到る。道頓堀は申すに及ばず歌舞伎座、さては京都の各劇場、各映畫館共に幕間をさいて舞臺人の觀客總立となり、萬歳を三唱して皇室の彌榮を壽ぎ奉つた。寫眞は歌舞伎座。





(5)海軍へ繪の寄贈

嘗て大阪地方海軍人事部では、海軍思想普及の意味で松竹圖案部に依囑してゐた「楊子江朔江の圖」「商船臨檢の圖」の二つが完成したので、松竹白井會長より安住人事部長正式寄贈の手續を取り、三月十三日鳥江宣傳課長が會長代理として納品した。

(6)白井會長の出發

別項の如く、鮮滿を經て北支方面の視察をする松竹白井會長井上常務一行は、三月廿三日午前十時四十五分大阪發列車で出發、驛頭には白井信太郎副社長を始め松竹社員、新舊俳優、レヴューガールなど盛んなる見送りがあり、會長らは元氣に進發した。

一、彌藤二　吉田玉米
一、註進　吉田玉德

山の段

一、久我之助清舟　吉田玉幸
一、娘　雛鳥　桐竹紋十郎
一、こし元小菊　桐竹紋太郎
一、こし元桔梗　吉田文之助
一、大判事清澄　吉田榮三
一、後室　定高　吉田文五郎

美濃屋の段

一、美濃屋三勝　桐竹正又亀
一、半七の伯母　吉田小兵吉

酒屋の段

一、娘　お園　桐竹紋十郎
一、親　宗岸　吉田玉藏
一、半兵衛女房　桐竹紋太郎
一、舅　半兵衛　桐竹門造
一、娘　おつう　吉田玉枝
一、美濃屋三勝　桐竹正又龜
一、茜屋　半七　吉田玉市

盲枝櫻雪社

一、福の市　吉田榮三
一、德の市　吉田文五郎
一、玉の市　吉田玉次郎

◇大阪支部新設◇

"籠寅"演藝部

事務所　大阪市南區高津十番町二十番地
電話南二六三一番

東京本部

東京市淺草區松清町田原町ビル三階
電話淺草一三五番

名古屋支部

名古屋市昭和區東畑町一ノ二〇番地
ミズホ二九三七番

神戸支部

神戸市兵庫區今出在家町一ノ一〇
兵庫四四三七番

廣島支部

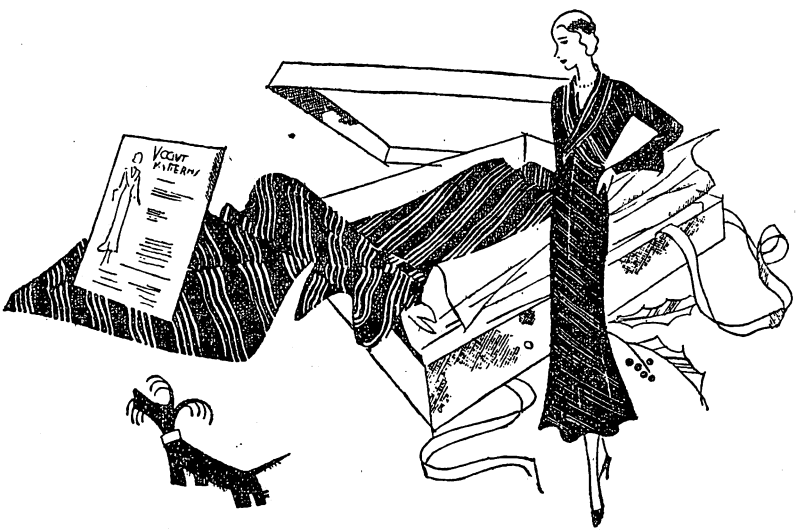
廣島市新天地　新天劇場内
中二六九九番

あらゆる宣傳廣告

プロセス
美術看板製作

いやしつらぬでじ存御をグオヴの春

いさ下店來御度一ぞうど　？かすま



屬專團劇歌女少竹松

大谷洋裝衣裳店

大阪市南區高津五番丁二三

電話戎 三五〇三番 四二一一番

道頓堀だより（四月興行一覽）　編輯部

これが例年なら、春だ踊だ、踊だ春だなぞと、花の季節を謳歌すべき陽氣になつたが、長期建設の國民總力戰の折柄、銃後は層一層の緊張を以て、興亞の春に處してゐる。そんな時に、わが劇界も國策に沿うた陣容で、一齊に眼ざましい總力戰である。正に、四月の大阪劇壇は近年稀に見る盛觀といふべきで、歌舞伎座に於ける菊吉合同、中座の忠臣藏上演なぞは、單なる觀客の興味本位とのみはいへない。

一は劇壇史的に見て、現代を代表する二名優の握手結合こそ、かかる時局柄意義深いものを感じずにはゐられない。

即ち、國民親和の表象ともいへるのである。

それから、延若魁車壽三郎市藏宗十郎等に依て、忠臣藏の忠實なる上場は、思想的にまた當を得たる出し物といふべく、記錄的な興行でなくて何であらう。

歌舞伎座

關西で初めての菊五郎一座と吉右衛門一座の合流公演である。多年この菊吉合同は好劇家待望の話題となり、嘗ては鴈治郎在世當時より、鴈を加へての三派合同なぞも考へられてゐたといふ問題の大芝居である。此度はこの菊吉の外に三津五郎友右衛門を加へた純東京大歌舞伎の一座で一日開場。

第一歌舞伎十八番「暫」

市川宗家の許し物を三津五郎が初めて演ずる「暫」である。友右衛門が受の清原武衡、田之助の鹿島入道、時藏の妹照葉、染五郎の成田五郎、男女藏の加茂次郎なぞで見せる。昨年の顔見世には市川三升の鎌倉權五郎が好評を博したが、それと見比べるのもまた好劇家の娯みの一つであらう。

第二「菅原傳授手習鑑」

東京歌舞伎座に於て絶讃を博した菊吉の「寺子屋」である。卷頭の狂言解説にもある如く、これは何段物かの續きの一場面に過ないけれど、最も高潮に達した一幕で而も親子兄弟、師弟の人情がよく描かれてゐる。菊五郎の松王は嘗て鴈治郎の源藏を向ふに廻して、この歌舞伎座で熱演した印象が、まだ大阪人の眼には殘つてゐる筈だ。こんどは吉右衛門の源藏で、あの熱のある藝と屹と嚙み合ふやうな舞臺を見せてゐる。友右衛門の玄蕃、時藏の千代、男女藏の戸浪である。

第三新歌舞伎十八番「高時」

これは默阿彌作で、九代目團十郎の當り藝、原作は「北條九代名字功」上中下の一幕で、活歴物の一部を所作事風に獨立させたものである。世に奢る北條高時が、或夜天狗に嬲弄されて自分より强いもの、存在を自覺する筋で、何か知ら現代にも一つの示唆を與へる狂言、吉右衛門の高時が九代目讓りで見せ、菊五郎が大佛陸奥守で出る。

第四「娘道成寺」

ファン熱望の菊五郎の踊、「鐘に恨みはかず〳〵こざる」と見るも艶に、白拍子花子が一幕中に八回も衣裳を替へて踊るのである。文句なしの豪華舞臺。

吉右衛門が特に大館左馬五郎輝秀で後ジテ迄を叮嚀に見せやうといふ決定版、長唄は松永和風、鳴物は望月太左衛門、三味線は柏伊三郎に、舞臺裝置は小村雲岱氏で官能的な背景―。

第五「盲長屋梅加賀鳶」

江戸の生世話の味を充二分に發揮した默阿彌物。五代目菊五郎が明治十九年初演以來音羽家の家の藝である。菊五郎の按摩道玄、加賀鳶松吉の二役、吉右衛門の加賀鳶松藏で、道玄の惡魔主義、鳶の

人情の機微なぞをうがつてゐる。四幕である。

第五「五條橋」「芝翫奴」

月の卷「五條橋」は友右衛門の辨慶に男女藏の牛若丸、花の卷「芝翫奴」は三津五郎を始め又五郎右近、太郎なぞで錦繪美の舞臺。

中座

歌舞伎座の菊吉合同に對抗してこゝは珍しくも東西合同の大一座で一日初日。延若魁車長三郎市藏壽三郎等に宗十郎の加入、「假名手本忠臣藏」の通しで、こんどはカットで水臭くなつた部分も復活し、また劇中早替りなぞもあつて賑やかに見せやうといふ寸法。それに二段目に挿入された建長寺は、鴈治郎が遠き昔上場以來絶えてゐたのを此度復活するなど興味がある。即ち場割は、

大序、建長寺、足利家門前、松の間、道行(落人)、扇ケ谷、明渡し、街道、二つ玉、勘平住家一力茶屋、討入。

延若の師直、由良之助、定九郎與市兵衛、魁車の判官、お輕、義士、壽三郎の若狭之助、不破數右衛門、吉右衛門、市藏の本藏、石堂右馬之丞、吉田忠左衛門、長三郎の直義、伴内、千崎彌五郎、力彌、宗十郎の顏世、勘平、仁木左京之助なぞの役々で活躍する。

切に長三郎の「保名」と若手連の「花見踊」がある。

浪花座

四月一日から籠寅興行部の經營で時局まんざい大會を開催する。いづれも新メンバーの漫才連で大いにハリ切づた舞臺を見せる。出演者は——。

(關西)花柳糸吉扇太郎、河内家鶴枝目玉、砂川政子國春(關東)永田繁子女一休、吉原家〆吉〆坊、端唄とん子美代司、中村種二隅田川ちどり、柳家喜久三君勇、アクロバチックバー(シズオ、マサオ、ヨシオ)、花廼家照駒成駒、櫻川梅夫小夜子源丸、ビツコロショウ、永田一休和尚、菊川時五郎大津繪花奴、春風小柳桂木東聲、カクテルショウ等。

角座

新舊合同劇が三月を京都南座神戸松竹劇場と出演して大入を續けての歸演、小太夫玉太郎壽之助に市松延見子加入、それに新派連は小波若朗村田駿島田敬一若宮里路笈川武夫に清水一郎梅野井秀男、女優は瀧連子若葉蘭子六條奈美子で、出し物第一林二九太作「男子非常時」四景、第二所作事「お染久松東の錦繪」一幕、第三鄕田惠作「西住戰車長」三幕六場、第四行友李風作「國定忠治」二幕三場一日開場。

文樂座(別項參照)

京都南座

曾我廼家五郎劇で一日開場、一回興行で第一「無閑マダム」第二「命の術立」、第三「心の渦卷」、第四「慰問文」、第五「若き日の影」を出す。中旬まで開演、後半月は神戸松竹劇場へ廻る。

神戸松竹劇場

浪花座の三月に好評を博した女劍劇の中野弘子一座とチンピラ劇團の登場である。弘子は大阪で公演した「勤王圖繪」、チンピラは「おしどり道中」を出し、これも中旬まで行つて後半月を京都南座へ廻る。

東京劇壇

四月の東京歌舞伎座は左團次梅玉仁左衛門幸四郎等で第一「春日局」二幕、第二眞山青果作「元祿忠臣藏」二幕三場、第三「安宅」長唄竹本連中、第四吉田絃二郎作「聯隊旗」一幕二場、第五「十二姿俠裝」「奴道成寺」▼東京劇場は家庭劇、第一「喧嘩商賣」、第二「寒紅梅」、第三「老中尉と犬」、第四「日の丸をふる母」、第五「赤い家青い家」▼明治座は花柳らの新生新派舊闘劇、第一青江舜二郎作「一葉舟」五幕、第二大池唯雄作宇野信夫脚色「吉原堤の仇討」四場第三吉屋信子作金子洋文脚色「妻の場合」▼國際劇場は松竹少女歌劇の「東京踊り」を始め、史劇「白虎隊」、オペレッタ「ライラック・タイム」を上場。

道頓堀十五年

―昭和劇壇史―

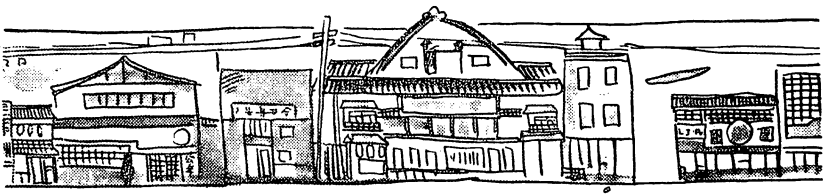
鳥江銕也

昭和二年二月

この月は大正天皇の御大葬が取行はせられて京阪神の各劇場は奉悼の裡に開演さる。先づ、中座の陣容は初春の二の替りとして、鴈治郎一座の居据りに、東京より市川中車、澤村宗十郎一門の參加、宗十郎の末子源平が訥升に改名後初の大阪入りである。

狂言は一番目右田寅彦作「紀國文左大盡舞」三幕、中幕「一谷嫩軍記」須磨浦の場、淨瑠璃「薪荷雪間の市川」（山姥）常盤津連中、二番目玩辭樓十二曲の内「時雨の炬燵」紙屋内の場、大切「大津繪」竹本長唄常盤津連中。

「紀文」は宗十郎の當り狂言で文左衛門の役が品のある舞臺を見せ、福助の几帳太夫、扇雀の誰袖、魁車の緞子大盡。零落した三代目紀文と吉原の几帳太夫の悲戀を中心に、大盡舞の巷說を扱つたものである。中幕の「須磨の浦」即ち壇特山は、鴈治郎の無官太夫敦盛、中車の熊谷直實、宗十郎の玉織姫の顔合せに人氣を呼ぶいつ迄も若い成駒家が、明治廿三年京都祇園館で、九代目團十郎の熊谷に初顔合せ以來大阪では初めての敦盛である。その次の「山姥」は宗十郎の山姥、長三郎の怪童丸、右團次の山樵實は三田仕人、「時雨の炬燵」は鴈の治兵衛、福助のおさん、魁車の小春、中車の五左衛門、市



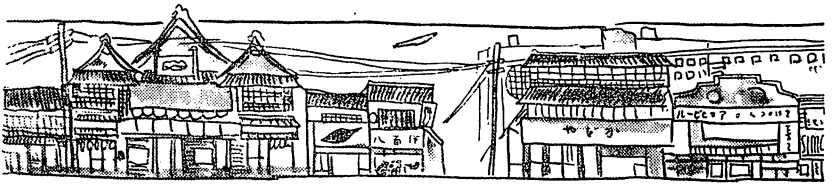
藏の孫右衛門。この時の觀劇料八圓で連日滿員だつたといふから、當時の景氣の程も思ひやられる。

涙花座は澤田正二郎の新國劇、第一トルストイ原作「復活」三場、第二額田六福作「相馬大作」六幕、澤田の大作が千變萬化の活躍、多少劍劇の域を脱して內容的にイデオロギッシュなものを覗かせた新解釋劇である。この興行十五日打上げ、十九日初日で滿鮮巡業を終えた河合武雄が座員の補充を行つて開演、顏觸れは河合の外に小織桂一郎、梅島昇、村田式部大矢市次郎、武田正憲、木下綠三郎等、第一眞山青果作「淺草寺境內」二幕、第二小酒井不木作「紅蜘蛛奇譚」二幕、第三「馬賊藝者」五幕の三篇、このうち「馬賊藝者」は河合の藝者お長で、所謂滿鮮土產といふ觸込み、劇中國境警備の歌を座員に歌はせ、花柳界などで大いに流行す、この歌が大阪で歌はれ初めたのは、恐らくこの時が最初ではなかつたらうか。

角座は長太夫等の**八千代座**專屬劇團が掛り、その代りに**松島八千代座**には我童、愛之助、吉三郎、橘三郎、荒五郎、巖笑、長三郎霞仙、莚女、雀右衛門等の松竹專屬の歌舞伎連が晝夜二部を開演、晝の第一「三日太平記」二幕、第二大森痴雪作「松平長七郎」一幕、第三「三人片輪」一幕、第四「新版歌祭文」野崎村夜の第一「奥州安達原」袖萩祭文、第二「有馬猫」六幕を出す。

辨天座は**文樂座**の道頓堀轉出第二回、前「伽

中座「一ノ谷嫩軍記」熊の敦盛、中車の熊谷



羅先代萩」大序より御殿迄、中「平假名盛衰記」笹引より逆櫓迄、切「壇浦兜軍記」阿古屋琴責の出し物で、紋下津太夫以下一座大いに張切つてこの興行も大入續き。

その頃の**樂天地**には大新派劇と銘打ち、都樂文男、松浪義雄、木村操、野澤英一、木下吉之助、大井新太郎、福井茂兵衛、東愛子等の一座が掛つてゐた。

吉田文三歿す、（二月十三日）享年六十四である。文三は文樂座の人形遣ひの重鎭で、本名壽賀幸三郎といふ、元治元年三月大阪新町の出生、幼少より文樂に入り血の滲むやうな苦勞をして來た名人、荒事の人形をよく遣つた。同人は前年末より胃癌を患ひ、一月興行にも一寸出たが病革つて休場、そのまゝ不歸の客となつた。最後の手摺は「繪本太功記」の光秀、「合邦ヶ辻」の合邦等である。

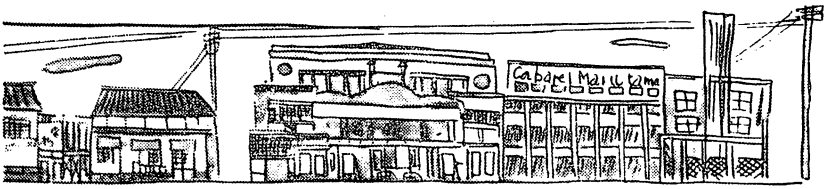
「道頓堀」誌の催しとして、二月二十日中座前三龜で第二回川柳座句會が開かる、第一回は一月中旬、當時北畠にあつた南北邸に集まる。その頃作者、俳優間に川柳熱がさかんだつた。

同年三月

中座は東京大歌舞伎一座が水入らずの來演である。即ち市村羽左衛門、市川三升、市川中車尾上梅幸等、出し物は一番目「伽羅先代萩」三幕、花水橋、御殿、床下、對決、刄傷の通し上場、羽左衛門の八汐に勝元、三升の頼兼、男之助、梅幸の政岡、中車の彈正といふ役々、中幕「土蜘」は梅幸の當り藝、大正十二年三月の同座で鳩治郎の頼光で上場以來五年振り、梅幸の叡山學僧智籌實は土蜘の精、羽左の頼光、中車の保昌等の豪華版、二番目「雪暮夜入谷畦道」二幕、羽左の直侍、梅幸の三千歳、中車の市之亟で、羽左梅幸の同狂言は三十年程前、角座に來演當時上場以來であるといふ、延壽太夫の美聲も大阪人の興味を惹く。この「三千歳」のそばやの亭主仁八を今の前進座の甚右衛門がやつてゐた。

大切は木村富子作「雪女郎」一幕、これは家橘のための新作舞踊である。

浪花座は新派不振の聲高い折柄、從來の興行政策を一變して、脚本本位に俳優を集めて興味



（中座「三千歳」の羽左の直侍）

を唆らうといふ膳立、第一中村吉藏作「獅子に喰れる女」二幕、第二「娘道成寺」長唄連中第三大阪毎日新聞連載三上於菟吉作中井泰孝脚色「炎の空」五幕、俳優は梅島昇、大矢市次郎、柳永二郎、武田正憲、木下吉之助、藤岡登喜次、高田亘等に女優は東愛子、水谷八重子。水谷は歸朝第二回の大阪出演である。第一回は先月**松竹座**に「鷺娘」を踊つたが、その時東京から飛行機で乘込み、ファンを唖つと云はせた。

角座は志賀廼家淡海一派が六年振りの出演で新作揃ひの出し物。第一「牛から馬へ」第二「後棒先棒」第三「濱の兄弟」第四「兄弟どつこ」毎日二回開演、その頃松竹で募集した新女優連もこの一座に加はつてゐたし、今家庭劇の人氣者天外も澁谷一雄の名で活躍してゐた。

辨天座は文樂座人形淨瑠璃の本格興行、紋下津太夫の合三味線友次郎の再勤、靜太夫改め四世大隅太夫の披露、それと合三味線道八の初顔合せ、つばめ太夫の合三味線勝郎、人形座頭に吉田榮三の昇進などと問題澤山で賑やかな膳立、前「本朝廿四孝」大序より十種香迄、十種香を朝太夫、松太郎、中「心中天網島」河庄と紙屋内が出る。「河庄」の切を津太夫友次郎、紙屋内の切を土佐太夫、吉兵衛、次「御所櫻堀川夜討」新大隅の披露狂言として先代の當り狂言辨慶上使を語る、切「伊達娘戀緋鹿子」人形文五郎十八番の八百屋お七で太夫は若手の掛合。

文樂の中堅で美聲を謳はれた**竹本菅太夫**歿す（三月十六日）。享年六十六。同人は先代源太夫の門下、本名蜂塚直吉といひ和歌山市の生れ、中年より淨界に身を投じたが、天來の美聲に惠

まれ文樂の花形となる。

同年四月

春が來て花と踊にいろどられた四月の道頓堀は、**松竹座**「春のおどり」の大レヴューを初めとし、この大阪に意義ある興行として二つの追善劇と一つの改革が行はれた。それは**浪花座**に於ける十代目片岡仁左衛門の追善劇と、**中座**の曾我廼家十郎追善劇だ。それから**文樂座**が時代の要求に應じて、晝夜二回興行に改革された事である。

先づ、**浪花座**の陣容を覗くに、十代目仁左衛門三十三回忌とあつて、東京より久々振りに片岡仁左衛門（先代）千代之助（我當）親子に、我童（現仁左衛門）の松島家一門、それに實川延若、阪東壽三郎、嵐巖笑、市川市藏、市川莚女中村雀右衛門に、この間中病氣だつた尾上卯三郎が加入。

一番目「彦山權現誓助劍」吉岡邸出立、毛谷村の二幕、延若の六助、我童のお園で見せる新作「小楠公」一幕は先代追善狂言として大森痴雪作、十代目がその晩年正成に扮し、我童（その當時東吉）の正行で櫻井驛の訣別を演じて好評を博した絲故に因り、これは成長した正行が弟達と共に父の弔合戰に出る兄弟の訣別を描いたもので・仁左が四條中納言で出る。延若、壽三郎、橘三郎、當之助（現吉三郎）等も應援する。中幕「西鄕とぶた姫」一幕は池田大伍作、延若のぶた姫當り藝、壽三郎の西鄕、市藏の大久保である。二番目『都一中』二幕、榎本虎彦作の仁左の當り藝大正六年中座上演以來の出し物、**仁左**の一中我童の娘おつる、千代之助の水野金之助、卯三郎の船宿長兵衛、壽三郎の黑川久太夫、市藏の源四郎等で、あの寂のある一中節の流祖都太夫の名人氣質を描いて、世に諦めた寂しい人間の姿を見せた處にこの芝居の狙ひがある。大切「大磯小磯」一幕。

中座は十郎の三回忌で五郎劇の出演、第一「鴨川千鳥」第二「脫線」第三「金、金、金」第四「春雨の夕」第五「圓山だんご」。十郎、五郎が曾我廼家を組織したのは明治三十七年正月、歌舞伎から轉向して新喜劇を樹立、笑ひの中に

も涙ぐましい友情の籠つた追善興行である。

角座へは新聲劇一派が歸演する。晝夜二回興行で「俠骨幡隨院」六幕十二場を出す。中田、辻野、小笠原、女優では富士野蔦枝、和歌浦糸子等の活躍である。

辨天座の人形淨瑠璃は一月以來好況裡に打續けたが、この興行から晝夜二部となり晝の部は「假名手本忠臣藏」大序より茶屋場迄、夜の部前「義經千本櫻」通し、切「三十三所壺坂寺」を出す。

岡本綺堂先生逝去之記

山上貞一

昭和十四年三月一日は如何なる悪日であつたか、我が綺堂先生御逝去の日として終身忘れ難き印象の日となつた。

午後零時二十分におこときれになつた。

悲電は飛んで二時半頃、私は中座三月興行の初日で、恰も益田甫君の『一日だけの新家庭』の幕が降りた時に受取つた。

一時少康を得られてゐただけに私は驚いた

『遠方を御苦勞だつたな。すまなかつた。もう大丈夫だよ。芝居は何時くるね』

『四月に參ることに決定いたしました』

『そうか、それまでには快くなつてるよ』

私は現に御逝去八日前の二月二十一日の夕この力强きお言葉を聞き安心して退京したのだつた。それだけに驚きも强く、悲しみも例えやうがなかつた。

御告別式は翌々三月三日午後一時より二時まで青山齋場で池上本門寺法主出座の下に壯嚴に行はれた。松竹株式會社々長大谷竹次郎東寶劇場株式會社々長吉岡重三郎、大日本俳優協會々長中村歌右衛門、伊原青々園、岡鬼太郎の諸氏侍立の下に劇文壇並に演劇關係者の總ては踵を接して御燒香下された。私はこれほど全體的な御葬儀に列したことがない。

式終つて二時卅分青山齋場出棺、午後三時代々幡火葬場に火葬に附された、お伴をしたのは遺族並に親族と門下生一同であつた

超えて三月七日一七日の忌日に、春三月とはいへ氷雨の如く冷く沛然たる大雨の中に、青山墓地に先生の御遺骨は葬られ、白木の墓標は悲しくも建てられた。

常樂院綺堂日敬居士享年六十八才

私はいま上京の時間に追はれてゐる。書くべきことはあまりに多いが他日數百頁を貰ふことにする。（三月二十日夜）

編輯室

⊙四月號は菊吉特輯とした。御覽の如き豪華版で、いよ〳〵本誌も本格的軌道に乘る。表紙繪は長谷川小信氏の「田世太閤記」の久吉、卷頭に木村富子女史の創作短歌を頂いた。それから菊吉特輯には食滿南北、渥美清太郎、永田衡吉、中井浩水、宇野信夫、篠山吟葉、遠藤爲叟氏ら一流劇界人の玉稿で賑やかだ。

⊙關西歌舞伎については、毎號ガク〳〵の御意見を頂く、わが夕刊大阪新聞主筆鷲谷樗風氏や、南木芳太郎氏の忠臣藏研究記事がある。また映畫欄擴充の意味から、本號より斯界のパイロット玉木潤一郎氏にお願ひして有益な記事を頂く事になつた。「道頓堀十五年」も漸やく昭和二年四月まで漕つけた。

⊙好劇家のために、歌舞伎解說をはじめた、これは觀劇上唯一の好參考であらうと思ふ。漫畫欄もわが酒井七馬、大槻たもつ、正木彥諸氏の御努力で賑はひ、新舊合同劇には菱田正男氏、滿支旅行の白井松竹會長へ送る言葉を冨田泰彥氏にお願ひした。かくて四月號は滿艦飾の豪華陣でお手元へ……。

⊙お詫び……。田川建吾氏から有益な記事を頂いたが次號に掲載させて頂く事にした。それから本號は四月五日發行の所、印刷技術に念を入れたゝめ遲延した事を讀者諸君にお詫びする。來月はいよ〳〵百五十號記念で、編輯室は大ハリキリ、次號からはかねて豫告の上方近世名優傳を始める。

⊙執筆は高谷伸氏で第一回は「中村宗十郎」からお願ひした。この明治初期の名優から、鴈治郎に到る迄の上方名優の傳記を連載するのも本誌ならでは出來ない一大事業である。本誌同人山上貞一氏が轉居した、兵庫縣武庫郡瓦木村新田字甲子園五六一の二である。

本誌編輯事務及營業事務は一切左の編輯部に於て取扱つてゐますから、月極申込其他お問合せは左の所へ願ひます。

大阪市南區大寶寺町仲之町六一　道頓堀編輯部

道頓堀　第百四拾九號

定價　一部　金參拾錢（送料壹錢）
半年　六冊　金壹圓八拾錢
一年　十二冊　金參圓參拾錢（送料共）

▼廣告取扱　大阪電報通信社　北區中之島二丁目

▼廣告の御用は「電通」又は當編輯部へ御申附の事

昭和十四年四月八日印刷納本
昭和十四年四月十五日發行
大阪市南區久左衛門町八番地
松竹株式會社大阪支店內
發行兼編輯人　島江銕也
大阪市東成區鶴橋北之町一
印刷所　加藤印刷所　電話天王寺二二四七番

大阪市南區久左衛門町八番地
松竹株式會社大阪支店內
發行所　道頓堀社
大阪市南區大寶寺町仲之町六一
道頓堀編輯部

おやつに

酵母菓子

ビスコ

慈母の味

偏食を補ひ
グン〜伸ばす
ヴィタミンの力

專賣特許

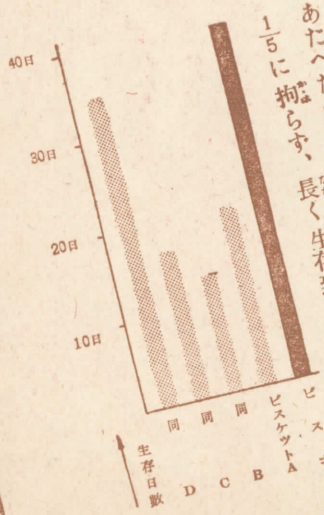
一ケ十錢

證明された

この榮養價

大阪市立衛生試驗所々長
下田博士實驗報告

健康な十姉妹を選んで、一定の餌料にビスコの粉末一〇%を混じてあたへ、他の十姉妹には、同一の餌料に數種のビスケットを粉末にして各一〇〇%あたへ、同時に飼育實驗せしところ、左記の比較表にありますとほり、ビスコをあたへた十姉妹は、あたへたビスコの量が他のビスケットの1/5に拘らず、長く生存致しました



(東京・大阪)グリコ株式會社

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和十四年　四月一日印刷（毎月一回）
昭和十四年　四月五日發行（五日發行）

「道頓堀」　第十四年　第百四十九輯

壹部　定價　金參拾錢

肌にしみ通って榮養になる……

クラブ美身クリーム

若返りは！決定版のムーリクリ

若返りはなぜクラブ美身クリームに限るか？　それはホルモンや純良脂肪分が肌の中にぐんぐんしみ通る科學的榮養クリームだからです。小じわがとれて美しく若返るのもホルモンの科學作用あればこそです。

水仕事は！ぬレアが手もに

働いてしかもきれいな手に……。それにはお勝手、お洗濯、ふき掃除などの後にクラブ美身クリームをぜひ！　ヒビ、アカギレ、シモヤケを防ぐと共に、肌アレをなほし美しい手にします。

特許ホルモン配合
強力榮養クリーム